

お～い
介護しろ！！



K・ボーイ

1 1月25日。

「兄ちゃん、オシッコ連れて行っておくれ」

食堂のダイニングテーブルで、昼食を終えた荒川タカヨが、古田健一に声を掛けた。

健一は、食事が困難な男性の世話をしていた。スプーンにのせたお粥を、男性の口元に運ぶ手を止めた。

健一が荒川に近寄る。

荒川は、グループホームの利用者で、九十歳を過ぎている女性だった。自分で歩くことは難しいのだが、人が手引きをすれば歩ける。

「オシッコしたい。便所に連れていきなさい！」

荒川は漏らしそうなのか、切羽詰まった表情で命令口調だった。

「わかったよ」

健一は、荒川の両手を持って体を立たす。

トイレは食堂と隣接されている。

「しかぶってしまった……」

トイレに入った瞬間、荒川は落胆したようにボソリと言う。

見ると、彼女のズボンはビッシヨリと濡れていた。どうやら、漏らしたようだ。

健一は、うんざりとした表情をする。

「早くしないから出てしまった！ あんたが悪い！！」

荒川は、急に健一に八つ当たりする。

「もういい！ 家に帰る！！」と、荒川がむくれ顔をする。

しばらく荒川は、便座に座るも、どこかイライラしている様子だった。

「荒川さん、もう終わりましたか？ ズボンを替えましょう」

健一がタイミングを見て、濡れたズボンの着替えをしようと思ったが、

「もういい、あんたじゃダメ！」

荒川がふてくされたように言って、着替えを拒んだ。

荒川の対応に困っていると、女性スタッフの千春がトイレに入って来る。

「荒川さん、うち出ました？」

千春は、笑顔で尋ねる。

「あんたかい、今日はダメやった」

千春の顔を見ると、一変して荒川の表情がゆるんだ。

「古田さん、ここは私がしますから、食事のお世話を続けて下さい」

健一は、荒川の対応を千春に任せて、食堂に戻った。

健一は、食事を終えた中島カズヨを、車イスで居室へ連れて行く。

中島は、九十八歳の女性で、いつも疲れた表情をしている。

居室に入ると、大きなベッドがあり、木目が光るタンスが置いてある。そして、ベッド横には、アンティークなライトスタンドがある。どれも高級感があるものであった。彼女の子供さんから、家にいるような雰囲気与生活させてやりたいという希望で、自宅から持ってきたものだった。

戦後から彼女は、旦那さんと商売をして成功した富裕層である。彼女が大きな屋敷に住んでいて、いつも高価な家具に囲まれて生活していたことは想像できた。しかし、八畳ほどの居室では、ベッドとタンスだけしか持ち込めなかった。本人自身は、裕福な生活をしていたことも覚えていない様子である。お好みのベルサーチのシャツを着ていても無表情である。

「中島さん、入れ歯を出して下さい」

健一が、ボソリと言って、彼女の口元の前に右手を差し出す。

健一は、口腔ケアをしようとする。

口腔ケアとは、わかりやすくいうと食後の歯磨きのことである。中島の場合、義歯をしている。義歯とは、入れ歯のことをいう。彼女は総入れ歯である。上下の入れ歯を取り出して、きれいに水洗いをする事と、うがいをしてもらい、口の中の食べ残しのものを出すことが目的であった。

「痛っ！」

いきなり、中島が健一の右手を噛みついた。

健一の声に反応するように、ベテラン女性スタッフの北川が慌てて居室に入ってくる。

「古田さん、どうしましたか？」

北川は、厳しい表情で健一に尋ねた。

彼女は、介護スタッフのリーダーであり、健一の教育係りである。何かにつけ、健一の仕事ぶりに細かく口を出して指摘をする。

「中島さんが、入れ歯を出してくれないんです」

健一が、困った様子で答えると、

「古田さん、ちゃんと、入れ歯を洗うことを中島さんに説明したんですか？」

北川は、健一を問い詰めるように、きつい言い方で尋ねる。

「いえ……」

北川の圧倒感みたいなものに押されて、健一は小さな声で答えた。

「昨日も言ったはずです。入れ歯を洗うことを本人に説明することを……もう、ここは私がしますから、午後からの入浴の用意をして下さい」

北川は呆れ顔をして言う。

健一は、北川に言われるまま、浴室で風呂の準備を始める。

健一が歩行器を押して、織田康男の居室へ行く。歩行器というのは、手押し車のことをいう。織田は、八十七歳の男性である。午後から入浴を予定していた。

織田はベッドに横たわっていた。

「織田さん、入浴の時間です。浴室に移動しましょう」

健一が優しく言う。

「風呂には入らん」

織田が、あっさり無愛想に言い返す。

「腰が痛いから、動けない」

織田の場合、風呂に入ることを面倒くさがる時、腰痛のことを持ち出して拒む。そのことを知らされていたので、健一も根気よく入浴を勧める。

「腰が痛いなら、僕が起こしてあげますから、入浴しましょう」

健一は、しびれを切らして強行的に、織田をベッドから起こそうとする。

「入らない！ 離せ！！」

織田は、反発するため手をグーにした。そして、健一の右手の腕を払いのけるように思いきり叩く。

「やめろ！」

一瞬、健一が織田に対して感情的になる。

その声に反応するように、北川が居室に飛んできた。

結局、北川が、織田の入浴の世話をすることになった。

ようやく仕事が終わった。

健一は、施設外にあるバルコニーのベンチに、ぐったりと腰かけた。そこが喫煙場になっている。雲ひとつない晴れた冬空だが、外に出るとひんやりとする。健一はタバコを吸う。

施設は男性2名、女性6名が生活している。現在、1名は入院中である。全員の年齢は、90歳前後の老人ばかりである。今日もなんとか仕事が終わった。だが、何ひとつ仕事ができなかった。介護の仕事が、こんなにきついものとは、思った以上だった。

健一は、大手自動車メーカーの製造の仕事をしていた。工場勤務で検査部門の責任者だった。工場内にも部下がいて、会社内ではいいポストにいた。だが、製造した自動車の中で、リーコル車が見つかった。事故などはなかったが、会社には多額な損失を出してしまった。責任者の健一も、何らかの責任をとらなければならない。

会社から言い渡されたのは、別会社への出向だった。

出向先は福祉施設でグループホームだった。

健一は、とまどうばかりだった。

今まで、機械ばかりあつかってきた人間には、人を相手にする仕事など、まったく未経験である。しかも認知症の老人ともなると、自分の言うことは聞かず、わがままばかりで、どう対応していいのかわからない。食事の世話、トイレの世話、入浴の世話と、どれも厄介すぎて、逃げ出したいくらいだった。

健一がタバコを吸い終わりかけた時、施設長の高倉が現れた。

「お疲れさまです」

高倉がにこりと笑う。

「お疲れさまです」

健一は、灰皿にタバコをもみ消した後、高倉に挨拶する。

高倉は、ズボンのポケットからタバコを取り出し、健一の横に座る。

「少しは仕事に慣れましたか？」

高倉がタバコに火をつけながら尋ねた。

高倉は、見るに穏やかそうな年配の男性で、のんびりとしている感じを受ける。

「いや・・・・・・・・まあ、なんとか・・・・・・・・」

健一は、あいまいな答え方をして、高倉に苦笑いをする。

「まあ、ゆっくりと、あせらずに、ここで生活している皆さんのお世話をして下さい」

高倉は笑顔で言う。それは、健一が介護の仕事に、うんざりしていることを察するように言っているようだった。

「私は、たまに自分の悩みを、ご老人の皆さんに話すことがあります。すると、いろいろなことを教えてもらえますよ」

「えっ!？」

突然、高倉が突拍子もないこと言い出したので、健一はキョトンとした。

「何しろ、ここで生活している皆さんは、私にとっては人生の先輩ですから」

高倉の言葉は、健一には冗談でしか思えなかった。確かに、ここで生活している人は、自分よりも人生の先輩である。だが、認知症のご老人に、健一が抱えている問題を理解してもらい、適切なアドバイスをすることなど無理なことだ。変なことを言う高倉に、健一は心の中で嘲笑った。

千春がバルコニーにやって来た。高倉に客人が来ていることを伝えた。

高倉は、慌てるようにタバコを灰皿にもみ消して、施設の中へ入って行く。

再び、健一がタバコに火をつける。

「そうだ」

健一は思い出したように、携帯電話を取り出して電話をする。

「ああ、俺だ。どうだ・・・・・・・・今夜あたり会えないか？ ああ、わかった・・・・・・・・それじゃ、待っている」

健一は、約束をとりつけて電話を切った。

「なんとかしなきゃなあ・・・・・・・・」と、思い切ったように言って、吸いかけのタバコを灰皿にもみ消した。

健一は、仕事帰りに焼き鳥『月光』に立ち寄る。店は、健一が利用している私鉄線駅近くにある。健一は都市郊外に住んでいる。駅通りは、数件の店もあり人通りもあるが、それ以外は住宅街で静かな場所である。

『月光』は、健一の幼なじみが営んでいる店だった。

「いらっしゃいませ。あら、おじさん」

店に入ると看板娘の知佳が、愛嬌良く出迎える。

店は十人ほど座れるカウンター席と、テーブル席が二つの小さな店だが繁盛している。健一が店に来たのは、午後十時過ぎで客入りのピークが過ぎた後だった。

店に入ると、カウンター席に年配のサラリーマン風の男性がひとりと、テーブルには若い女性客二人しかいなかった。

健一はカウンター席に座った。

「よお」

健一は、カウンター内で手羽先を焼いている、桜井雅俊に挨拶する。煙に目を細めながら、桜井は何も言わずに挨拶がわりに右手を上げる。

健一と桜井は、小学生からの同級生で、もう三十年以上の付き合いになる。同じ車好きということで気が合った。二人とも同じ会社に就職をした。健一は、機械いじりが好きだったので、車の製造も苦にはならなかった。だが、桜井は、製造の仕事が合わなかった。工場のラインで同じことを繰り返す作業が、どこか息苦しく思えて、就職してすぐに辞めてしまい料理人になった。

「お待たせしました」

桜井が皿に載せた手羽先の焼き鳥を、カウンター席に座っている男性客の前に置いた。

「いらっしゃい」と、桜井は店の主人らしく健一に挨拶して、慌しく次に注文されたものを焼き始めた。

「健一さん、お連れの方は？」

桜井の妻である加奈子が、突き出しの枝豆を出して気を使うように尋ねる。

「先に生ビールもらうよ。どうせ、中村は仕事で遅いだろうからな」

わかりきったように健一は言って、飲み物を注文した。

「生一杯ね」

加奈子が、知佳に飲み物を伝える。

「はい」

威勢のいい声で知佳が返事をして、生ビールを持ってくる。

「はい、お待たせしました」

知佳が、冷えたジョッキに入れた生ビールを健一の前に置いた。

「ありがとう」と、言って健一はジョッキを手にして、半分までビールを飲んだ。

「うまい」

仕事で疲れて飲むビールの味は、格別に感じたのか、健一は、つい言葉が出てしまった。

「新しい仕事は、もう慣れましたか？」

加奈子は、健一が、今までとは違う仕事で苦労していることがわかっていて、そのことを気遣うように尋ねた。

「慣れるというものじゃないよ……毎日、毎日、言い聞かせても、ぜんぜん聞こうともしないし、時には叩かれたりもするよ。まったく困ったものだよ」

健一は介護の仕事を、うんざりとしたように答えた。

「でも、俺決めたよ。中村に頼んで、また工場の仕事に戻してもらおうと思っている。元の工場じゃなくても、関連会社でも紹介してもらおうと思っているんだ」

「中村さんって、本社勤務の……？」

加奈子が、思い出したように尋ねた。

中村は、健一の高校の後輩で本社勤務をしている。総務の仕事をしているため、本社の人間にも顔が利く。そのことを利用しようと、健一は思った。

「でも、本当に製造の仕事に戻れるの？」

加奈子が心配して尋ねた。

「大丈夫だよ。俺は、車の製造で主任までやっていた人間だ。今回のリーコルのことで、ちょっとだけ製造の仕事を離れただけで、また戻れるよ」

健一は、自信あり気に言って、残りのビールをグツと飲んだ。

健一が、カウンターに座って二時間近くになる。店を閉める時間になった。

「もう一杯どうだ？」

桜井が、ビンビールを持って健一の横に座った。

中村が来ない。携帯電話で連絡するも返事がない。

健一は、イラついて携帯電話を何度も見る。

かたづけを終えた加奈子と知佳が、帰宅する

「おじさん、ごゆっくり」

知佳が、笑顔で言う。

「ごめん、もう少し待たせてもらうよ」

健一が、すまなそうに頼む。

「せっかくだから、ゆっくり飲んで下さい」

加奈子が、気を使うように言って、知佳と一緒に店を出た。

「桜井、すまないな……」

「気にするなよ」と、桜井がビンビールを差し出す。

健一のグラスにビールがつかれ、続いて健一が、ビンビールを桜井のグラスに注いで口をつけた

。

「今度、真美ちゃんとは、いつ会うつもりだ？」

桜井が聞きたいことを言うと、

「えっ！」

一瞬、健一が渋い顔した。

真美というのは、健一の娘で七歳になる。妻とは離婚調停で、月に一度だけ会うことが約束されていた。

「実は、明日会うはずだったが……」

健一が言葉を濁す。

「会うはずだったが、どうした？」

桜井が気にするように尋ねた。

「則子が……しばらく真美と会うのを、やめてくれないかって、頼まれたから……しばらくは会わないことにした」

健一は、重い口を開くような言い方をした。

「則子さんが、そう言ったのか？」

桜井は目を丸くして尋ねた。

則子というのは、健一の別れた妻だった。

「俺が真美と、ちょくちょく会っていると、則子の方に真美がなつかなくなるから、やめてほしいと、言われたから……」

健一が複雑な表情で言う。

「ちょくちょくって、月に一度だけじゃないか。おまえ、それを了承したのか!？」

「了承なんかしないよ！」

健一が、反発するように言い返す。

「今の俺じゃダメだ。自分でも思うよ……なんか、仕事にも気が入らないし、父親の権威みたいなものがないからな。そんな姿、子供にも見せたくないから……だから、もう一度、製造の仕事に復帰して、自信をとり戻して、真美に父親らしい姿を見せてやりたいんだ」

健一は、強い気持で宣言するように言った。

「そうか……それじゃ、なんとか元の職場に復帰しなきゃなあ。でも、本当に製造の仕事に戻れるのか？」

桜井が激励するも心配そうに尋ねた。

「大丈夫だ。そりゃ、損失は出したけど、俺だけが悪いわけじゃない。責任は、自分よりも上の人間にある。俺は、いいとぼっちりだよ。それに、中村も俺に言ってくれたよ。一時的で、また戻れることを」

健一は、グツとグラスのビールを飲んだ。

「損失を出したって、今までの実績があるわけだし、そんな俺をまだ会社は、求めているよ」

健一は、自信ありげに答えた時だった。

ガラんと、店の扉が横に開いた。

暖簾をくぐって、スラリと背の高いスーツ姿の男が現れた。

男は中村だった。

「よお！ 待っていたよ」

案心したように健一が、カウンター席から立ち上がり、中村に近寄る。

桜井は、カウンターの奥に入った。

「遅れてすみません……」

中村は、うかない表情で言葉も弱々しく挨拶する。

「ずいぶん遅かったな。残業していたのか？ まあ、座って飲もう」

「……」

健一がカウンター席に座ることを勧めると、中村は静かに腰を下ろす。

「生ビールでいいか？」

「……ええ……」

中村はビールが欲しいのか、どっちつかずの返時をする。

「桜井、生一杯」

健一が飲み物を頼んだ時だった。

「申し訳ありません。古田さんのご希望にはそえません」

突然、中村が立ち上がり、思い切ったように健一に深く頭を下げた。

「えっ！？ 」

健一がキョトンとした。

「古田さんを、元の職場に戻すことも、関連会社の紹介も、僕にはお世話できません……」

中村は、言いにくそうに健一に告げた。

「どういうことだ？」

健一が、困惑したように尋ねた。

「会社の決定です。今回のリーコル車に関わった社員には、左遷するか、会社を辞めてもらうかの、どちらかだと……」

「そんなこと言わず、別に前の職場じゃなくてもいいから。はら、下請けの工場でもあるだろう。とにかく車の製造の仕事だったら、どこでもいいから、なあ、頼むよ……おまえの力で、どこか紹介してくれよ」

健一は、切羽詰まったように言い寄る。

「古田さん……あなたは、わかっていないようですね。誠に言いにくいことですが、会社は、もう、あなたを必要としていません。今回のリーコル車を出したことが、会社に、どれだけの損失と信用を失くしたことなのか、そのことをよく考えて下さい。古田さんは、まだいいほうです。会社から、仕事の世話をしてくれたわけですから……すみません。失礼します」と言って、健一に深く礼をして、中村は足早に店を出て行った。

中村は心にあったものを、そのまま健一に告げた。それは、辛い気持ちを押し殺すようにも見えた。

桜井は、二人の会話のやりとりを見ていた。

健一は、啞然として立ち尽くすと、桜井と目が合った。

「ダメだって……………」と、健一が苦笑いして、カウンター席に座る。

「飲もうか」

桜井は、余計なことを言わず、五合の焼酎ビンをカウンターに置いた。その後、健一は、焼酎の水割りを何杯もおおる。

「うすうす、わかっていたよ……………会社にも、元の製造の仕事にも戻れないことは……………でも、認めたくなかった！　俺、車しか造れない男だから、そんな俺が、じいちゃん、ばあちゃんの世話なんか、出来ないよ……………」

健一はボヤいた後、そのまま眠りこんでしまった。

それは酔いつぶれているというより、何かに叩きつぶされたようにも見える。

桜井は、うつ伏せになった健一の背中に、毛布を掛けてやる。

次の日。

健一はハローワークにいた。デスクトップの画面の求人閲覧を見ている。

朝、健一が目を覚ますと、カウンターに顔をうつ伏せにしていた。ハッとして、一瞬自分は、どこにいるのか顔をあげた。見渡すと、すぐに『月光』だとわかり、そこで一夜を明かしたことに気付いた。

「おはよう」

カウンターの中で、包丁でまな板を叩く音をさせる、桜井が挨拶をする。桜井は、健一に付き合っ

て店に泊まった。
健一は、桜井と一緒に朝食を食べた。ごはん、味噌汁、明太子だけの料理だったが、二日酔いの健一には絶品の味だった。食事中、桜井は何も言わなかった。健一も、桜井が、気を使って

ていたことを感じていた。
健一が店を出た時、ちょうど日の出の時間だった。照り返す陽射しが、まぶしく感じる。酔いもさめていたのか、どこか、すがすがしさを感じさせた。不思議だったが、活力的なものが芽生えてくる。すると、元の職場に戻れないことは、仕方のないことだ。落ち込んでも、どうにかなるものでない。そう思うと、仕事を探す気持ちになってくる。そして、その思いのまま、ハローワークへと足が運んだ。

「千春は、よくやっているわ。介護の仕事」

知美が、求人票のあるボードの前で、感心したように言う。

千春は仕事が休みだった。久しぶりに親友の知美に会った。一緒にランチを食べた後、ハローワークへ付き添いとして来ていた。

「私のことより、何かいい仕事先ありそう？」

「うん・・・・・・・・なかなかないわね。やりたい仕事って・・・・・・・・」

知美は、のんびりした口調で答える。

「もう、まったく・・・・・・・・働く気がないのね」

千春が、呆れ顔で言う。

「私は、千春みたいにはいかないのよ」

知美は、転々と職を変えている。就職活動中であるが、正直仕事をしたいような気がない。と、いうのも、どんな仕事をしたいのか、自分ではわからなかった。そのため、おもしろくないと感じると、すぐに仕事を辞める。そんな自分とは違い、千春は、学生時代から、福祉の仕事することを決めていた。将来は、老人ホームを作りたいという夢がある。そんな千春のことが、うらやましかった。

「どうして、介護の仕事なの？」

知美は、千春が介護職を選んだ理由を興味深く尋ねた。

「私、子供の頃から、両親が共働きだったから、いつも、おじいちゃんとおばちゃんと一緒にだったの。けっこう、優しくされていたから、昔からお年寄りも、みんな好きになるのよ。その好きな気持ちがあるから、働けるのよ」

「そう・・・・・・・・わたしも、見つかるかな・・・・・・・・」

再び、知美が、のんびりした口調で言う。

「大丈夫、そのうち友美も見つかるわよ。でも、とりあえず何か働こう」

結局、仕事は見つからず、千春が友美を励ましていると、求人票閲覧を終えて、椅子から立ち上がる健一を見つけた。

「あっ！」と、千春が思わず声を出す。そして、健一の視界から消えるように、壁にベタリと張り付いて身を隠す。

「どうしたの？」

知美も、わけがわからず、千春と同じように壁に張り付く。

健一は、千春の存在に気付くこともなく、ハローワークを出てゆく。

それがわかると、二人は壁から離れた。

千春は、つい何かいけないものを見たような行動だった。だが、隠れる理由がない。おそらく健一は、転職で仕事を探しに来ていたことはわかっていた。自分の存在に気付いた時、健一は、バツの悪い顔をするだろう。そして、自分は、どういうふうになればいいんだろう。少し複雑な気持ちがある、それを避けるための行動だった。

「ねえ、あの人、知り合いの人？」

知美が興味深く聞く。

「やっぱり、辞めるのか・・・・・・・・」

千春は、ボソリと言う。

その後、健一は就職活動を続けた。三社ほど面接を受けたが、採用にはならなかった。正直、就職は難しいものがあるが、あきらめることなくハローワークに通って、製造の仕事を探した。

休憩中。健一は、施設のバルコニーで煙草を吸っていた。

健一は、早く次の仕事を決めて、介護の仕事を辞めようと思っていた。自分に向いていないと思いつつ、生活のために働いている。しかし、不思議なもので、人間は何か条件つきで仕事をすると、嫌な仕事も出来るものだ。

学生時代、建設現場での仕事をしたことがあった。今思えば、二度とやりたくない仕事である。夏の陽射しの中を、汗まぎれになっての作業だった。重労働だったため、一緒に働いた仲間は、すぐに辞めたが、健一は一週間だけだと思えば、不思議と頑張れた。今の状況は、期間が決まっていなくても、それと似ている。食事、トイレ、入浴といった介護の仕事も、他のスタッフの見まねで、何とかできるようにもなり、仕事にも慣れていった。

煙草を吸い終えた頃、携帯電話に目をやると、一瞬ハツとする。則子から、着信履歴が三件あった。則子とは、離婚してから、子供の面会の時だけ、電話で話しをする。決まって、いつも健一の方から、電話を掛ける。則子から、電話を掛けてくることはなかった。そのため、電話があったことが、驚きというよりも、不思議な感覚が強かった。

健一が、すぐに則子に電話をした。すると、ワンコールで電話に出た。

「俺だけど……電話があったから……何か用があるのか？」

「ええ……まあ……」

則子は、歯切れが悪い返事をする。

「ところで今度、真美と会う日だが、25日のクリスマスの日じゃ、ダメだろうか？」

健一は、自分の用件を先に言う。

「そう……でも、25日は無理みたい」

「えっ！ どうして？ やはり、一ヶ月に一度は、真美と会いたいと思っている。真美の成長も見守っていききたいから」

健一は、則子に頼むような言い方した。

「実は、学校の終業式が終わったら、真美を、松本の実家に連れていこうと思うの」

「そうか……正月は、実家で過ごすわけか……それだったら、正月明けでもいいから、真美と会わせてくれないか？」

健一は、自分なりに解釈して再度頼んだ。

「うん……それが……」

則子は言葉を濁した。

「どうした？」

健一が気になるように尋ねた。

「私、真美と一緒に、松本に引っ越そうと思うの」

則子は、思い切ったように言う。

「えっ！？」

健一は、思いもよらないことで声がうわずる。

「どういうことだ！？」

健一は聞き直すように尋ねた。

「くわしいことは、また後で話すわ」と、それだけ言う。

「おい！」

健一は、則子を呼び止めるように声を出すも、電話が一方向的に切れた。

「おい、どういうことだ……」

健一は気が動転しながら、再び則子の携帯に電話をしようとする、

「古田さん、ホールに来てください」

千春が健一を呼びに来た。

健一は、携帯電話をズボンにしまいこんだ。

健一がホールに来ると、千春は、入浴用にTシャツと半ズボン姿だった。

「織田さんを入浴させますから、脱衣所まで連れて来てください。それから、最近、織田さんは、自分ひとりで、立ち上がるがあります。膝が悪いので、しっかり見守って立たせて下さい」

千春は、忠告するように言うが、健一は反応なく無言だった。

健一は、則子からの電話がショックで、ろくに千春の言っていることなど、耳に入っていなかった。

「古田さん」

千春が強い口調で言う。

「えっ！」

千春の声で、健一は、我に戻ったように声を出した。

「どうかされましたか？ 何かボーツとしていましたけど」

千春は心配そうに尋ねる。

「いえ・・・・・・・・すいません」

健一は、一瞬、自分を見失ったことを隠すように謝る。

「では、お願いしますね」

千春は、慌ただしく事務室に向かった。

健一は、織田の居室へ向かう。

「織田さん、お風呂に入りますよ」

健一が、ベッドで横になっている織田に声掛けをする。

「うん、入ろう」

珍しく今日は、素直に入浴することを受け入れた。

織田は、ゆっくり腰を上げて、なんとか起き上がり、ベッドに座るような体勢になった。織田の前に車イスを置いて、「それじゃ、織田さん、肘かけを両手で持って立ちましょう」と、健一が誘導する。すると、ズボンのポケットの中から、ブーンと携帯電話の着信音がした。

健一が携帯電話を手にとると、則子からだった。すぐに電話を出ようと思ったが、「う～ん」と、織田は低い声を出して、車イスの肘あてに、両手をつかんで立とうとする。しかし、膝が悪いためうまくいかない。

「織田さん、動かないで、少し待っていて」と、健一が、ひとりで立つのを止めさせる。健一と織田は目が合った。聞かせたくない話のため、健一は、織田に背中を向けて電話に出る。「則子、松本に帰る話だけど、もう少し待つことは出来ないか？」
健一は電話に出るなり、真っ先に自分の思いを告げる。

「ごめんなさい・・・・・・・・もう決めたの。さっき言い忘れたけど、引越しの準備をしていたら、あなたの荷物があつたから送ったわ」

則子は、冷静に用件を伝える。

「荷物なんかいいから、なあ、今夜でも会って、もう一度話し合おうじゃないか」
健一は、頼みこむ言い方をする。

その時だった。

ドスンと、鈍い音がして、「痛っ！」と声が出る。それに反応するように、健一が振り返る。

「あっ！」

思わず健一が声を出す。床に倒れこんで、苦痛な表情をした織田がいた。

夕方。右足首に包帯を巻かれた織田が、車イスに乗って、病院から施設に戻ってきた。すぐに健一が、織田のそばに近寄る。その後に北川と千春も、織田に近寄る。

織田が居室で転んだ後、北川と千春も、織田の元に飛んできた。織田は苦痛の表情で、車イスに座るも、右足首が痛いと訴える。大事をとるため、施設長の高倉が、織田を病院に連れて行った。

「幸いのことに、捻挫（ねんざ）でした。骨折までいってなかったようです」

高倉が、優しい口調で説明する。

健一は、不安で強張った表情だったが、高倉の言葉にホッとして顔がゆるんだ。

「皆さんには、ご迷惑おかけしました」

織田の娘が、スタッフにすまなそうに言う。

高倉から連絡を受けて、織田の娘が、病院に駆けつけて施設まで付き添ってきた。

娘といっても、六十は近い年齢の女性だった。

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」

健一は、自分の不注意で、織田に捻挫をさせてしまったことを、心から詫びるように娘に頭を下げた。

「頭を上げてください。どうせ、父が、古田さんの言うことを聞かずに、立とうとしたことですから」

「えっ!？」

娘の言葉に反応するように、健一は頭を上げる。

「以前、父と同居していた時にも、同じように転倒したことがありました。その時も、私の言うことは聞かずに、勝手に立とうとしました。つい頑固なところが出てしまうようです。でも、こんな父ですが、皆さん、よろしくお願いします」

娘は、父親のことで、心配をかけてしまったことを、詫びるような言い方をした。それが健一には、意外に思えた。娘からは、文句のひとつも言われても、仕方ないと思っていたからだ。

「おとうさん、ちゃんと皆さんの言うことを聞いて下さいね」

「うん………わかった」

織田は、娘の顔をそらしながら、無愛想に答えた。いつも強気な織田は、その時は子供のように見えて、どこかよそよそしくも感じた。

健一が、織田の車イスを押して居室へ向かった。

織田をベッドに寝かせつけると、娘は帰って行った。

健一が事務室に戻ってくると、すごい剣幕で千春が近寄る。

「どうしてですか？ 私は言ったはずですよ。織田さんから、目を離さないでほしいって！」

千春は、健一を責めるような言い方だった。その姿に、高倉と北川が、仰天して目を丸くした。

「いや・・・・・・・・それは・・・・・・・・」

千春の言動は、思いもよらないことだった。それに押されるように健一は、言葉を返せなかった

。

「古田さんは、この仕事を辞めようと思っていることはわかっています。それでも、ここで仕事をしている限りは、利用者さんのことを、しっかり見ていて下さい。古田さんは、わかっていないようですが、ここにいる利用者の皆さんは、古田さんのことを必要としています」

千春の言っていることが、凶星のような気がして、健一は黙るしかなかった。

千春が思ったことを言い終えると、皆の視線が、自分に向けられていることに、ハッと気付く。

「ごめんなさい」

千春は我に戻ったのか、恥じるように、慌てて事務室を出て行った。

健一は、千春の剣幕にひるんで立ちすくんでいた。

次の日から、健一は、きちんと利用者に聞こえるように声掛けをして、ていねいに介護をするように心がけた。なるべく笑顔で接するようにした。ぎこちない表情ではあるが、優しい口調で、利用者に気持ちよく介護を受けてもらおうと努力した。そのことを三日間続けると、周りの人間も、健一の変化を感じ始めた。

休憩時間、健一が、バルコニーに出て、携帯電話で則子と話をしていて、すると、高倉がやってきた。

「それじゃ、24日に見送りに行くから」

健一は、約束をとりつけて電話を切った。

「古田さん」

電話を終えたタイミングを見て、高倉が声を掛けた。

「はい」

健一が、携帯電話をズボンのポケットにしまいこみながら返事をした。

「どうしても、お願いしたいことがありますて……」

高倉は言いにくい様子だった。

「何でしょうか？」

「実は、31日の夜勤をお願いしたいと思っています……その日の勤務者が、急に都合がつかなくなりまして、他の者にも頼んでみましたが、皆さん大晦日は、いろいろ都合あるようで、古田さんは無理でしょうか？」

高倉は、切羽詰ったように尋ねた。

「大丈夫です。31日は勤務させていただきます」

健一は、あっさりと答えた。

「そうですか。ありがとうございます！」

高倉は、案心して笑顔になった。

独り身の健一には、大晦日も正月も、誰とも過す予定がない。娘も遠くへ行ってしまい、寂しい年末を過ごす。そう考えると仕事をしているほうが、気がまぎれてよかった。

「最近、利用者さんと接する時、よく笑顔になっていますね」

高倉は、感心したように言う。

「そうですか……」

健一は照れ笑いをする。

「恥ずかしいことですが……」

健一は言葉を切った。一瞬、言うのをためらったが、思い切って言うことにした。

「正直、ここでの仕事を早く辞めたいと思っていました。自分は、車を造る仕事があっている。車を造る仕事こそ、自分が必要とされている仕事だと思っていました。もちろん、今でも、車を造る仕事をやりたいと思っています」

健一は真顔になる。

「でも、織田さんが捻挫した時、千春ちゃんから言われて気付きました。ここで生活している、じいちゃん、ばあちゃんも、自分のことを必要としている……だから、ここで働いている限りは、一生懸命、介護の仕事をやろうと思っています」

健一は、今の心境を言葉にした。それは、何か宣言をしているようにも見えた。

「あっ！ すいません。つい勝手なこと言いまして……」

健一は、余計なことを言いすぎて思わず謙遜した。

「わかりました。私としては、古田さんが、ずっと、ここで働いてもらいたい気持ちですが、職業選択は自由です。でも、ここにいる限りは、精一杯介護の仕事をして下さい。よろしくお願いします」

そう言って、高倉は笑顔で握手を求めた。

「はい」

健一も笑顔で答えて握手をした。

12月24日。

健一は、則子と真美を見送るために東京駅へとやって来た。時間に余裕をもって、バスに乗ったが、道中事故があつて渋滞に巻き込まれた。駅に到着した時、新幹線の出発時間ギリギリだった。

駅は、夕方のラッシュアワーで、人が入り乱れていた。健一は、人の間をぬって足早に新幹線のホームへやって来た。

ホームには、すでに新幹線が入っていて、乗客も乗り込んでいた。外から新幹線の中を覗きこむようにして、則子と真美のことを探した。ホーム側の車窓に座っている真美を見つけると、その横に則子がいた。健一が車窓を叩くと、真美がすぐに反応して、健一の方を見る。その瞬間、発車のベルが鳴った。

健一には聞こえなかったが、真美は、両手を車窓に当てながら、『パパ』と、呼んでいるようだった。新幹線が動き始めた。健一も、真美を追いかけるようにして歩き始める。真美の横で、則子が複雑な表情をする。

「おい！ 元気でなあ！！」

加速する新幹線に並ぶように、健一も走りながら真美に言う。

真美は、じっと健一を見ていた。それは、どこか切ないものを感じる。やがて新幹線は、健一の姿を追い抜いてゆくようにしてホームから出て行った。

健一は、息を切らしながらホームに立ち止まり、新幹線が出て行った方向を見つめていた。

健一は、駅からバスに乗って、自分のアパート近くのバス停に降りた。そこからは歩いてアパートに帰る。真美に会うために、久しぶりに全速力で走った。かなり無理をした。しかし、真美とは話をすることが出来なかった。そのことを思うと、健一の足取りは重く、体じゅうから疲れを感じた時だった。携帯電話にメールが入った。

電話を手にとると、『パパ、会いに来てくれて、ありがとう。いつか会おうね』と、真美からのメールだった。

健一は、娘から送られたメールの文字を見て、グツと心から、こみ上げてくるものがあった。それは、嬉しさというものより、愛おしいものに近かった。

健一がアパートに帰って来る。玄関を入ると、すぐに台所があり、その奥に六畳の間がある。その他に、風呂とトイレがあるだけの部屋だった。玄関に上ると、壁にある電源のスイッチ点ける。家族がいた頃は、どんなに遅く帰っていても、家には灯りがあつた。たった、それだけのことで、それが、どんなに暖かさを感じさせてくれたことなのか、身にしみてわかる。

健一は火燵に入り、冷蔵庫から取り出した缶ビールを飲んだ。ビールは冷たいと感じたが、おいしいとは思わなかった。

健一は、携帯電話を取り出し、真美に返信メールを出そうとする。しかし、自分の思いが、うまく文字にできない。そして、ようやく、

『メールありがとう。ちゃんと、ママの言うこと聞くように』と、返信する。結局、ありふれた言葉しか出なかった。

則子が外で働き始めた。健一から養育費を貰っているが、それだけでは生活が出来ない。すると、勤めに出ている間、真美が、学校から帰って来ると、家にひとりぼっちになる。そのことで、娘が、寂しい思いをするのではないかと心配だった。そのため、実家に帰ることを決めた。実家には、則子の両親が、真美の面倒をみってくれることになっている。

健一も、則子から説明を受けて、真美を松本に連れてゆくことを許した。

健一は、後悔していた。仕事がうまくいなくても、家族だけは、大事にすれば良かった。出来心で浮気をしたのは間違いだった。都合のいいことだと、わかっているけど、もう一度、家族との生活を取り戻したい。だが、今日の別れで、二度と、家族に戻れることはないと思った。すると、大粒の涙がこぼれてきた。唇をぐつとかみしめるも、涙が出てくる。手の甲で涙をぬぐっても、涙は止まらなかった。

12月26日。

健一が出勤して、すぐに朝礼が始まった。朝礼では、全員のスタッフが事務室に集まる。そこで、施設の行事や利用者の予定など、その日のことを連絡して確認をする。

「それから、昨夜、荒川さんのご主人が亡くなりました。今日がお通夜で、明日が葬儀になります」

朝礼の最後に高倉から報告があった。

「荒川さんは、お通夜と葬儀に出席されるでしょうか？」

千春が気になる様子で高倉に尋ねた。

「ご家族の要望は、本人には、ご主人が亡くなられたことは、言わないでほしいということです」

「つまり、お通夜や葬儀には出席させないということですね」

北川が、わかったように言う。

「認知症の荒川さんには、ご主人が亡くなったことが理解できるか。現状ではわかりません。仮に理解しなければ、葬儀の途中で不穏になり、家族の方を困らせることもあるかもしれない。また、理解したなら、ご主人を看取れなかったことを後悔して、悲しい思いをするかもしれないと、家族の皆さんが考えたうえでの決断です」

高倉が家族の思いを告げた。

スタッフは、いつもどおりに荒川に接することにした。

「にいちゃん、オシッコ連れて行っておくれ」

健一がホールに来ると、ソファに座っている荒川が、真っ先に声を掛けた。健一が荒川を手引き歩行でトイレにつれて行く。

「また、しかぶってしまった！ あんたが連れてくるのが遅いから！！」

荒川がズボンを濡らしながら、健一に文句を言う。

今日も荒川は、いつもどおり健一に世話をやかせる。

12月31日。

午後6時30分。健一が施設に出勤してきた。仕事は午後7時からだが、早めにきて仕事の準備をする。

「お疲れ様です」

ホールのキッチンに立って、そばをすする千春に、健一が挨拶をする。

「お疲れ様です……古田さん！」

千春が健一を呼び止める。

「おそば食べませんか？」

千春が、夕食で準備したそばを、健一に勧める。出汁の湯気が見えるそばは、美味しそうだった。

健一は、大晦日だといっても、そばを食べることを決めていなかった。しかし、そばを食べてみたい気持ちが誘った。

「いただくかな」

「じゃ、今用意します」

そう言って、千春は戸棚から、どんぶりを出して、湯とおしのそば麺を入れて蒲鉾を載せる。鍋に入ったそば汁をかけると、湯気があがる。最後にネギを入れたどんぶりを、健一に渡した。

「ありがとう」

健一は礼を言って、どんぶりを受け取り、そのままキッチンに立ったまま、そばを食べ始めた。

「うん、美味しい」

健一は、そばをすすりながら言う。

千春は、にこりと笑い。その後、

「古田さん……」

千春が何か言いかける。

「うん？」

健一が箸を止めて、千春の顔を見た。

「この前、すごく、きついことを言ってしまって、すいません」

千春は、織田が捻挫した時、健一に食ってかかって言ったことを気にしていた。後になって、かなり言い過ぎたことを反省していた。素直に謝ろうと思っていたが、なかなか仕事の都合で、健一に会うことができなかった。今が謝る時だと思い、千春が健一に頭を下げた。

健一も、織田の件だと、すぐにわかった。

「いや……別に……むしろ、千春ちゃんから言われてわかったよ。ここで生活している人は、少なからず自分のことを必要としていることを」

「そうですか……良かった」

千春は、やっとのこと、健一に謝ることができて、ホッとしたように言う。

健一は、千春に変な気遣いをさせてしまったことに悪い気がした。

「気にしないで・・・・・・・・」

健一が付け足すように言う。

「私ね．．．．．決めてるんですよ。ここで生活している皆さんにとって、都合のいい身内でいようって．．．．．」

千春は、照れるように意味ありげな言い方をする。

「えっ．．．．．！？ 都合のいい身内？」

健一が首を傾げた。

「よく感じるんですけど、皆さんは、身内の方が訪ねた時は、変によそよそしく他人行儀になっているようです。今まで、ずっと過ごしてきた、血をわけた本当の家族と会っている時は、もの静かで、もの分かりのいい、おじいちゃん、おばあちゃんです。でも、私たち介護する者には、無理なことを言ったり、わがままな行動したり、聞き分けがよくないことがありますよね」

「そう言われたら、そうだな．．．．．本当に血の分けた身内なら、ここでの生活の不平不満なんかも言ってもいいだろうし、自分たちに接するように、聞き分けのないことを、やってもいいと思うよな．．．．．本当の家族なんだから」

健一にも、思い当たることがあった。織田が捻挫をした時、娘には、よそよそしい態度をしていたことだった。

「きっと、皆さん無意識に家族には、特別気を使っていると思います。心配事や迷惑をかけることを．．．．．何だか、皆ストレスみたいなものがあるようで．．．．．だから私、家族の代わりに、都合のいい身内になろうと思います」

千春の言葉には、思いみたいなものがあった。

「皆さんが望むことは、出来る限りのことを受け入れてあげたいと思います。家にいる時みたいにリラックスできるように．．．．．もちろん、無理なことはありますけどね．．．．．あ、また熱くなっちゃった」

千春は、思わず自分が熱弁していたことに気付いた。そして、

「じゃ、そろそろ帰ります。お疲れさまです」と、健一から恥じらうようにして、急いでキッチンを出ようとした。

健一は、恥じらう千春の行動が、かわいいと思った。

「千春ちゃん」

健一が千春を呼び止めた。

千春が立ち止り振り返る。

「いいお年を」

健一がニコリと笑って言う。

「古田さんこそ、いいお年を。お仕事頑張って下さい」

千春もニコリと笑って、キッチンを出てゆく。

健一が、そばを食べ終えて、どんぶりを洗い終えて食器乾燥機に入れた。ふと、老いてゆくことは、身近な存在も、遠くのものになってゆくのか。健一の心は、寂しさみたいなものを感じた

。

今現在、施設は8名で生活をしている。男性2名と女性6名である。そのうち5名は車イスで、1名は歩行できる。残りの2名は、なんとか手引きでも歩行できる。

利用者全員は、大晦日も正月も、特別に家に帰ることなく施設で過ごす。また、除夜の鐘を聞くまで起きていることもなく、いつもどおり夕食を終えると、居室に戻り床へ入る。

介護者は、利用者を寝かすまで、パジャマに着替えさせたり、トイレに連れていったり準備に時間がかかる。

20時30分。

健一は、利用者全員を各居室に寝かした。その後、利用者が食べ終えた食器のかたづけ、昼間に干しておいた洗濯物を畳む作業をする。それを終わると、22時を過ぎて、すぐに巡視の時間になる。

巡視とは、見回りのことで、利用者の居室に行き、無事に寝ているかを確認することだが、ほとんどがトイレの世話になる。利用者は、紙オムツに尿とりパッドをして床に入る。尿とりパッドが濡れていると、それを取り出し、新しいものと取り換える。他の者は、利用者を起こして、トイレ誘導をするか、居室にポータブルトイレを設置して用を足すようにさせる。

22時の巡視は、2名ほど尿とりパッドの交換をした。

22時20分。

健一が巡視を終えて、ホールに戻ってきた。持参したマグカップにインスタントコーヒーを作
って、食堂の椅子に座って介護記録をつける。

22時の利用者の状況は、みんな寝入っていたので、全員に“入眠中”と記入した。それを終わると
、しばらく休憩をする。

ホールにある42型のテレビをつけると、紅白歌合戦でAKB48の大島優子が出演していた。普段
歌番組を見ることのない健一は、アイドル歌手の顔など、どうていわかるはずもなかったが、彼
女のことは、娘の真美がファンだったので、すぐにわかった。

真美と暮らしていた頃、テレビや雑誌で彼女のことは見ると、大はしゃぎをしていた。

今頃真美も、紅白歌合戦を見ているのだろうか？ そして、テレビの前で大はしゃぎをしている
のだろうか？ 健一は、携帯電話を手にして、真美の声が聞きたくなかったが、すぐにテーブルの
上に置いた。つい、家族のことを考えてしまう自分自身が、どこか弱い男で情けなく思う。

健一がテレビを消すと、窓の方から強い雨音が聞こえてきた。

23時45分。

外の雨は降り続けている。健一は、ついウトウトしてしまった。突然、大きな雷の音がして、健一がハッとして目を覚ます。この付近で雷が落ちたのだろうか、地響きがあった。健一が携帯電話を見ると、午前0時の巡視の時間になっていた。

健一は、懐中電灯を持って、ホールから一番近い、荒川の居室に向かった。

健一は、ゆっくりとスライド式の扉を開けると、正面に窓がある。その下にベッドがあった。ベッド脇にあるスタンドの灯りから、うっすらと荒川の寝顔が見える。扉の下には、小型センサーが置いてある。荒川が、ベッドから動いたらすると、センサー音を発して、ホールに伝えることになっている。健一は、小型センサーのスイッチをオフにした。

ベッドの横には、ポータブルトイレを設置してある。中を見ると、今夜は使用した後がない。まだ用を足していないようだった。

健一は、足音を立てずに、荒川の寝顔を覗く。小さな寝息が聞こえた。健一が、ゆっくりと居室を出ようとする。扉の前に置いてある小型センサーを手にした時だった。

「にいちゃん、ちょっと、待ちなさい」

突然、荒川が呼び止めた。

健一が振り返ると、「何も言わずに出てゆくのかい」と、荒川はパチリと目を開けて、ゆっくりと体を起こした。

「あいかわらず、にいちゃんは無愛想だね。人の顔を見る時ぐらい笑顔になったら、どうなんだい」

荒川は皮肉を言う。

「荒川さん、どうかしたの？」

健一が何事かと思い、心配そうに尋ねた。

「余計なことはいいのよ！」

荒川は、健一の気遣いに不服そうに言う。

「にいちゃん……私に隠し事しているだろう？」

「えっ！」

健一は、荒川の突拍子もない言葉に驚く。

「やはり・・・・・・にいちちゃんも、とぼけているんだね・・・・・・みんな、そうだよ・・・・・・私だけをのけ者にして・・・・・・あ、情けないね」
荒川は、自分を哀れ悲しむような表情で言う。

「さっき、うちの人に来て、私に言ったんだよ。俺は先に行く・・・・・・そう言って、帰っていったよ」

「うちの人・・・・・・えっ！」

健一は、荒川が言っていることが、先日亡くなった旦那さんのことだと察したが、どうして知ったのか。そのことが不思議に思えた。

「どうして、みんな私には言ってくれないの！　ずっと連れ添った相手だよ。せめて、別れを言わせてくれてもいいじゃないか・・・・・・一言だけ、あの人に謝りたいのよ・・・・・・ここに来る前、ケンカしたままだったから」

荒川は、健一に訴えるように言うと、グズンと涙ぐんでいた。

「にいちちゃん、あんた結婚はしているの？」

「えっ！・・・・・・あ・・・・・・」

荒川の思いもよらない問い掛けに、健一は声を詰まらせた。

「まあ、にいちちゃんのことはいいけど。私は、あの人と結婚して、いろいろなことがあった。泣かされたこと・・・・・・苦しかったこと・・・・・・でもね、あの人と離れてみて、わかることだけど・・・・・・いろんなことがあったから、夫婦になれたんだ・・・・・・」

荒川は、しみじみと語るように言うと、ブツブツと念仏を唱え始めた。

健一は、唾然としていた。

荒川は、念仏の唱えを終えると、静かに布団にもぐりこんだ。

健一は、荒川に何が起こったのか不思議な感覚だった。

「荒川さん」

健一が静かに声掛けするも、布団の中で荒川は寝入っていた。

健一は、センサーのスイッチを入れて床に置いた。健一は、荒川は寝ぼけていたのかと、首を傾げながら居室を出た。

その後、健一は、他の利用者の巡視を続けた。他の者は、おとなしく寝入っていた。

荒川は、きっと寝ぼけていた。不思議なことだが、身内が亡くなった時、寝ているところに、現れるという出来事を聞くことがある。ひょっとしたら、荒川の夫が表れて、別れを言ったということはあるかもしれない。認知症の荒川でも、長年連れ添った相手のことは、どこかで覚えているはずだろう。そのことを寝ぼけて口にした。健一は、そう考えることにした。だが、荒川が言った、旦那さんに別れを言わせてほしいという思いは、健一の心に残っていた。

巡視も、中島と織田の二人になった。二人の居室は、ホールから遠い場所にある。

健一が、中島の居室に入る。居室にある家具や装飾品を破損させないように、十分注意して、ゆっくりとした足どりで居室に入る。ベッドの中を覗きこむと、スタンドの灯りで、中島は、おだやかな表情で寝入っていた。

健一は、ビニールの手袋を両手にはめて、携帯タイプの懐中電灯をベッドに置く。そっと、中島が寝ている布団を少しだけめくって、懐中電灯の光を当てた。光は、中島のズボンに当たっている。健一が、ズボンを下して紙オムツの中に右手を入れた。中島の股間付近にあるパッドに触れると、尿は出ていない。中島は起きる様子もないため、そのまま居室を出ようとした。

「人のズボンに手を入れておいて、何も言わず出てゆくのかい」
居室の扉に触れた時、中島から、はっきりとした言葉で呼び止められた。健一は、足をピタリと止めて振り返った。

「中島さん、どうしたの！？」

健一がベッドに近寄った。

「何か用事がなければ、声を掛けちゃいけないのかい」

中島は、ふてくされた様子で言った。

「いや、そんなわけじゃ・・・・・・・・」

普段自分から、話しかけることのない中島が、声を掛けてきた。それも、はっきりした口調だった。突然のことで健一は驚いた。

「どうしたの？ ハトが鉄砲で撃たれたような顔をして」
中島は、健一の顔色を見たままに素直に言った。

「ねえ、ちょっと起こしてくれないかい」

「ああ・・・・・・・・」

健一は、言われるまま、左手を寝ている中島の肩に入れて体を起こそうとした。

「あんたダメだね」

「えっ！」

健一は、中島の言葉に反応するように手が止まった。

「まったくくなってないわね。いつも言われているでしょう。かならず、声掛けして、これから何をするかを相手に伝えて、それから行動だよ。そうでなきゃ、私だって起きようという気持ちにならないわよ」

中島は、強い口調で指摘する。

「そうだね・・・・・・・・ごめん」

健一は、本人から起きたいと言っておきながら、自分の対応にケチをつけるのは、いかがなものかと思いつつも、言われるままにやり直す。

「中島さん、体を起こしますね」

「笑顔で優しく言いなさい。私は無愛想な男は嫌いだよ」

今度は、健一の表情に中島はケチをつけた。

健一は、気を取り戻して、「中島さん、体を起こしますね」と、ぎこちない笑顔で声掛けした。

「なんか、変な顔だね。でも、努力だけは認めてあげる。じゃ、起こして」

中島は命令口調になる。

健一が中島の体を起こす。中島は、ベッドの上に腰掛ける体勢になる。

「もう年は明けたのかい？」

「ああ、もう年は明けたよ」

「そう．．．．．それで、今年は何年になるの？」

中島が気になるように尋ねた。

「今年は何年になるよ」

「だから、そうじゃなくて．．．．．西暦で何年なの？ こっちは長い間生きている分、あれこれ年号が変わって、いちいち覚えていないんだよ。もっと気をつかいなさい！」

中島は、怒った口調で言う。

「2014年だよ」

健一は、中島の怒りに対応するように、すぐに答えた。

「そう．．．．．じゃ、私はここに来て、もう十年になるんだね」

中島は納得するように言って、居室を見渡した。

「しかし、いつもこの部屋は、変なものばかり集まっているわね。そう思わないかい？」

中島は、つまらなそうに尋ねた。

「いや、どれも高価なものばかりで、素敵じゃないかな．．．．．」

「つまらないね。あんたの本音は、こんな老婆に、高価な家具や装飾品なんか持っていたって、なんの値打ちもないと思っているんだろう」

中島は呆れ顔して、健一のことを見透かすように言う。それは凶星だった。

正直なところ、この居室に置いてある家具や装飾品は、どれも名の知れた高価なものばかりであるが、中島自身は気にいっているとは思わなかった。

中島は、寝る時以外は、自分の居室で過ごすことはなかった。それは、この施設に来た時からそうだった。もともと人付き合いがいい中島は、いつもホールに来て、誰かとおしゃべりをして過ごすのが日課だった。認知症が進んで、あまり言葉を話すことがなくなった今も、みんながいるホールにいと、どこか穏やかな表情をする。中島にとっては、高価な家具や装飾品に囲まれている居室よりも、人とふれ合うホールのほうが、落ち着ける場所なのだ。健一自身もそう思っていた。

「情けないね・・・・・・・・」

中島はため息をつく。

「私は、長年夫と一緒に仕事をして、ある程度の貯えはしたけど・・・・・・・・今じゃ、このありさまね・・・・・・・・。お金なんか持っていたってしょうがないわよ。だって、私是一円だって自分では使えないから・・・・・・・・」

中島が、ぼやいた。

「もういいわ。私寝たいから横にして」

中島は、思ったことを言うと疲れた様子だった。

「それでは、中島さん、体を横にします」

健一は声掛けをして、丁寧に中島をベッドに寝かせて布団をかけた。

「今度は上手にできたわね。ありがとう」

中島は機嫌よく笑みを浮かべた。

「ねえ、頼みたいことがあるの」

突然、中島は思いついたように言う。

「何？」

「この部屋にあるものを売ってお金にしてくれない？ それで買って欲しいものがあるのよ」

「えっ！」

突拍子もないこと言い出した中島に、健一は目を丸くした。

「お金にするって、それは自分にはできないよ。それよりも何が欲しいの？」

「チョコレート」

「チョコ、チョコレート！？」

中島の欲しいものは意外だった。

「昔、主人と一緒に食べたの・・・・・・・・とても美味しかったわ」

中島は懐かしいように言う。

「そうだったの。それで、どんなチョコレートなの？」

健一は納得して興味深く尋ねた。

「・・・・・・・・」

中島は、話の途中で目を閉じていた。

「中島さん」

健一は、もう少しチョコレートの内容を聞きたかったが、中島はスヤスヤ寝入っていた。

中島がしゃべった。もちろん、中島も話すことはあるが、いつも疲れきった様子で、声掛けしても、「うん」とか、「ああ」と頷くだけだった。だが、今夜の彼女は、自分の意思をはっきり言った。こんなことは、初めてのことだ。一体どうなったのだろうか？ 健一は、首を傾げて静かに居室を出た。

織田の居室へやってきた。居室は、中島の向かえにある。

健一が居室に入る。天井にある小さな電灯が、居室全体を薄明るく照らしていた。

織田のベッドは、居室奥にある窓に沿って置かれている。

健一がベッドを覗きこむと、織田は眠りこんでいた。

健一は、中島と同様に布団に手を入れて、尿を出しているかの確認をした。濡れていなかったの、手を布団から出した。

その時、織田の目がパチリと開いた。

「あっ、織田さん、ごめん」

健一は、心地良く寝ていた織田を起こしてしまって、悪いことをしたと思った。

「じゃ、おやすみなさい」

健一は、織田が寝ているのを邪魔したようで、すぐに居室を出ようとした。

「なあ、ちょっと話さないか？」

織田が、背中を向けた健一を呼び止めた。

「何？」と言って、健一は、扉横にある壁のライトスイッチをオンにした。天井の灯りをつけて、織田のベッドに近づく。

「自分が転倒する前、おまえは、複雑な表情で電話をしていたが、何かあったのか？」

織田は、気になっている様子で尋ねた。

「いや．．．．．」

健一は、話したくないことを聞かれて返事に困った。

「隠さず話してみろ．．．．．お前から見れば、生きることに張りを失った老いぼれかもしれないが．．．．．おまえよりは、人生経験はあるはずだ

織田は、健一の心に、苦いものを持っていることを知っているような口ぶりだった。

健一は、離婚で家族を失って、心の中にモヤモヤしたものがあつた。織田の言葉で、話してみたら、少しは楽な気持ちになれるかと思い、口を開くことにした。

「離婚して、子供に会えなくなったんだよ．．．．．」

「離婚の原因は何だ？」

「俺の浮気が原因だ．．．．．仕事がうまくいかなくて、妻は子供の受験のことで忙しすぎて、俺が悩んでいることなんか、全然理解しようとはしなかった。それで、つい行きつけのスナックの子と．．．．．でも、そのことで、妻や子供の人生まで狂わせることになってしまった」

健一は悔やむような言い方をした。

「自業自得だな．．．．．」

織田は、健一に同情することなく含み笑いをする。

「笑うことはないだろう」

やはり、話すべきではなかった。健一は、ふてくされたように言う。

「まあ、怒っても何も解決はしないからな．．．．．。ところで、おまえは娘に会いたいのか

？ 」

「決まっているじゃないか・・・・・・・・でも、もう無理だよ」

健一は、半ばあきらめているように投げやりに言う。

「どうしてだ？ まだまだ、おまえにはチャンスがあるじゃないか」

「チャンスって・・・・・・・・よく言うよ。他人事と思って」

健一が否定的に言う。

「チャンスはあるさ。なぜならば、おまえは、俺の半分も生きてないじゃないか。人生だって、まだまだ、どうにかなる・・・・・・・・俺は、おまえと同じような思いをしたことがあった」

「えっ!？」

織田の言葉に反応するように、健一が身を乗り出す。

「俺は以前、女房以外の女と一緒に生活をしたことがあった。もちろん、家族と離れてなあ・・・・・・・・今から五十年も昔のことだが・・・・・・・・自分のことは、とにかく、おまえは、どうしようと思っている？」

「どうするって・・・・・・・・？」

唐突に尋ねられて、健一は返事に困る。

「俺は、その女と別れて、なんとか女房の元に帰れた。もちろん、すんなりとはいかなかったが・・・・・・・・」

織田は照れた笑いする。

「どんなことをしたら、奥さんに許してもらえたんだ？」

健一が興味深く尋ねた。

「俺は自分自身を変えた。そうしたら、女房ともやり直せた。とにかく、以前とは変わった自分を見せることだ」

「変わるって・・・・・・・・どうしたら？」

「どう変わるかは、自分で考えろ。自分から言えることは、後ろばかりを見るより、前に進むことを考えることだ」

織田は、言いたいことを告げると目を閉じた。

「あっ！ アドバイスをしてやったので、ひとつ頼みたいことがある」

織田は思い出したように目を開ける。

「実は・・・・・・・・」

織田は言いにくそうにする。

「何？」

「テレビで見た・・・・・・・・黒髪の長い女性が載った雑誌が欲しいのだが、買ってきてくれないか？」

織田は照れながら言うと、再び目を閉じた。

「黒髪の長い女性・・・・・・・・誰だ？」

健一は考えたが、さっぱり見当がつかない。

「もう少し具体的に言ってくれないかな？」と、織田に問い掛ける。「・・・・・・・・」

織田から寝息が聞こえた。

「織田さん」

健一が声掛けしても返事がない。

健一は、もう少し織田の話を聞きたかったが、起きる気配がないので、仕方なく居室を出た。

織田は、いつもとは違っていた。老いても、どこか自信に満ちた男という雰囲気を感じさせていた。一体、どうしたんだろうか？ 不思議に思うも、『自分自身を変えた』と、という言葉は、健一の心に響いていた。

その後、健一は巡視をしたが、荒川、中島、織田の三人は、朝まで目を覚ますことはなかった。雨は止んで、ホールの窓には、晴れ晴れしい朝の日差しが差し込んでいた。

不思議なことが起きた夜だった。まるで、キツネにつままれたような気分だった。

荒川、中島、織田の三人は、どこかいつもとは違っていた。どう違うかという、うまく説明ができないが、認知症で要介護の認定を受ける前の本人に、会えたような気がした。

荒川は、旦那さん思いの女性だった。中島は、堅実なしっかり者の感じだった。織田は、どこか力強い男の印象を受けた。だが、朝起床した時は、何も変わっていなかった。

荒川は起床後、すぐにトイレに連れてゆくも、不機嫌そうに健一に当たる。中島に声掛けして起こしても、疲れた表情で何も答えてくれない。織田は、腰が痛いと言って、ダダをこねてベッドから起きようとはしなかった。巡視時のような、しっかりとした意思みたいなものはなく、普段どおりに、要介護の認定を受けた老人だった。

朝礼時、夜勤者から、日勤者に申し送りがあるのだが、健一は、昨夜の出来事を報告しなかった。介護するうえで、利用者の変化を報告しなければならない義務はあるが、健一は半信半疑だった。事実どおりのことを報告したとして、他のスタッフは、信じてくれるか、どうか。要介護をうけた老人が、少しの時間だけ、認定を受ける前の人格に変化した。そんなことを言ったところで、真に受けてくれるとは思わなかった。結局、『特別なことはない』と、報告することにした。

「なんだって！ 夜中に認知症のじいちゃん、ばあちゃんが元に戻って、おまえに本音を言って、アドバイスしてくれた。何おかしいことを言っているんだよ。きっと、寝ぼけて夢でも見たんじゃないか」

健一が真顔で話すも、桜井は信じる様子もなく、盃を手にして笑い飛ばした。

健一は、桜井の家に行った。

桜井から、元旦の日と一緒に飲むことを誘われていた。

「そんなに笑うなんて、健一さんに失礼じゃないの」

加奈子が、台所から爛のついた日本酒の銚子を、二人がいる居間の炬燵の上に置く。

「ごめんなさいね。この人、酔っぱらっちゃって……」

そう言う加奈子も、信じていない様子で、銚子を健一の盃のほうに持って行く。

桜井は、元旦ということもあり、朝から酒浸りだった。酒酔いで顔も赤くなっている。

「やっぱり寝ぼけていたんだな……」

健一は、わかりきったように言って、加奈子から注がれた日本酒を盃に受けた。

健一は、昨夜の出来事を人に話してみたら、どんな反応をするのか、試すように桜井に話してみた。当然ながら信じる様子はなかった。そのことで、健一は、どこか安心した。本気で信じこんだら、どう説明していいのか困ってしまうのが本音である。桜井が言ったとおり、昨夜の出来事は夢だった。そう言ってもらったことで、そう思うことにした。

「そんな寝ぼけた話よりも、今年はいいい年にしなきゃなあ」

桜井が銚子を手にして、健一が持つ盃に日本酒を注ぎながら言う。

健一は、盃を口につけた後、銚子を持って、桜井が持つ盃に日本酒を注ぐ。

「何とか、製造の仕事に戻れるといいな」と、言って、桜井がグツと盃の日本酒を飲んだ。

「何とか製造の仕事を見つけて、真美と会えるようにならなきゃ」

健一は、願いというよりも目標みたいな思いで言う。そして、健一もグツと盃の日本酒を飲んだ。

「そうだよ。その意気込みだよ。飲もう」

桜井は、健一の威勢ある飲み方を見て激励する。

その後、健一は、荒川、中島、織田の三人と接するも、大晦日の夜に起きたことは二度となかった。もしかすると、あの時一瞬だけ、自分と三人の間には、何か不思議な力が働いた。それは、テレパシーというようなものかもしれない。しかし、それを言葉で説明することも、実証することもできない。結局、健一自身も、不可解な出来事しか考えつかず、夢としか思うしかなかった。

1月15日。

朝は、とても冷え込んでいる。

健一は、介護セミナーの研修を受けるため新宿駅にいた。会場は駅近くにあった。

「古田さん」

改札口を出た健一に、笑顔で声を掛けてきた男がいた。

「おう！」

近寄ってくると、健一は思わず驚いた。

男は田中という、以前健一と同じ職場の後輩だった。

「やはり、古田さんでしたね。お久しぶりです」

田中は、遠くで健一の姿を見かけたらしく、確かめるような言い方をした。

「田中！ 久しぶりだな」

健一は、なつかしそうに感激したように言う。

「誰だかわからなかったよ……」

田中は、スーツ姿に短髪のオールバックで、皮の黒カバンを持っていた。清潔感があって、さわやかな会社員というふうに見えた。だが、そのことが、健一には意外に思えた。

技術人間だった田中は、会社でも無愛想で、あまり笑うこともなく、真面目に車のエンジンに向かう職人気質の人間だった。髪もバサバサで、髭もそらない男だったのに、今会っている田中は、別人に見えたからだ。

「今、おまえ、どこで働いているんだ？」

健一は、真っ先に聞きたいことを尋ねた。同じ職場で仕事をしていた人間が、会社を辞めた後、どう生きているのか気になっていたからだ。

「今、ここで働いています」

田中は、名刺を手渡した。名刺には、伊豆にある旅館名が書いてあり、役職は主任と書いてあった。

「なんだ、おまえ旅館に就職したのか？」

「ええ、就職というより、その旅館の娘と見合い結婚しまして……まだ、見習いですけど」

田中は、照れ笑いしながら答えた。

田中は、昨日から東京に来ていて、旅行会社に新年のあいさつ回りをした。今から伊豆に帰る途中だった。

「古田さんは、介護の仕事をされていると聞きましたが？」

「ああ、グループホームで働いているよ」

「介護職って、けっこう大変な仕事でしょう？」

田中が気にかけるように尋ねた

「ああ・・・・・・・・。でも、なんとかやっているよ」

一瞬、健一は返事に困るも、それを押し切るように言う。

「そうですね。なんとか、やらなきゃいけませんよね。畑違いの仕事を始めただけですから、ふんばりも必要ですよ」

田中は、自分に言い聞かせるような言い方をした。

「おまえは、どうだ？ 旅館業って客商売だろう」

「僕、彼女のためにも、旅館の仕事を頑張っていこうと思っています」

田中は、はっきりとした口調だった。それは、生き生きしているようにも見える。

「もし、良かったら旅館にも来て下さい。十分サービスさせていただきます」

「ああ、機会があったら行かせてもらおうよ。しっかり頑張れ！」

健一は、にこりと笑って激励した。

「ありがとうございます。後輩の自分から言うのも失礼かと思いますが、古田さんも頑張って下さい。きっと、いい介護士になれると思います」

「えっ！ 自分が・・・・・・・・？」

健一は、田中が言ったことが、意外に思えて目を丸くした。

「どうして、自分がいい介護士になれると思うんだ？」

健一は興味深く尋ねた。

「だって、古田さん、以前とは変わったように見えるからですよ」

「どこが・・・・・・・・？」

「昔みたいに、複雑そうにイライラした顔つきしていませんから」

田中は、見たまま感じたことを言うと、

「それじゃ、そろそろ時間ですから、失礼します」

田中の乗る電車が、発車時刻になっている。田中は、深く礼をして足早に改札口の方に向かった

。

(俺も変わった・・・・・・・・)

健一は、田中の後ろ姿を見つめながら心の中でつぶやいた。

昼。

健一は、介護の研修セミナーを受けていた。会場は、ホテルの小ホールで行われ、参加者は三十名ほどだった。

休憩時間、健一は、会場外に設置された喫煙場へ行く。喫煙場といっても、ロビーにスタンド灰皿を置いただけのものだった。喫煙者は、スタンド灰皿を囲むようにしてタバコを吸う。

健一が、ジャンバーの内ポケットに入れておいたタバコを取り出すと、一緒に田中の名刺を手にした。健一はタバコを吹かしながら、田中のことを考えた。田中も製造とは違う会社に行くことを命じられて悩んでいた。

田中は、どういうふうにして人間性を変えたのか。結婚のため、やもえずに旅館の仕事をするようになったから、自分を押し殺すように変わったのか。それとも、元々は社交性があり、明るい性格の人間だったのが芽生えたのか。健一は、わからなかった。ただ、ひとつだけ言えることがある。人間性が変われば、人生も変わるということだ。田中の生き生きとした姿を見ていると、昔のことを悔やんでいるようには見えなかった。

今の田中の姿は、織田が言っていたことだと思った。

自分も、田中みたいになれるだろうか？

昔のことを振りかえずに、前に進んでいける人間に……………。

健一は、大きくタバコの煙を吐き出した。

2月10日。

朝、粉雪が降っている。積雪になるほどではないが、粉雪は止むことがない。

健一が出勤すると、玄関先で、施設長の高倉が、客人を見送っていた。その横には、車イスに乗った荒川がいた。

「おはようございます」

健一は、高倉と客人に礼をして挨拶をする。

「おはようございます」

高倉が挨拶すると、客人は健一に会釈する。

「こちら、荒川さんの息子さんです」

健一は、高倉から紹介を受ける。息子は、痩せた白髪で、紺のスーツ姿だった。見るからに品のある紳士だった。

「いつも、母がお世話になっています」

息子は、丁寧に健一に礼を言う。

「昨日、息子さんは、荒川さんのご主人の四十九日の法要に出席されて、今から、宮城のほうに帰られるそうです」

息子は、帰る途中で母親に会いに立ち寄った。荒川は、家族の意思で、夫の法要にも出席させなかった。

「それじゃ、母さん。また来るからね」

息子が別れを言う。

「・・・・・・・・」

荒川は物寂しい表情で頷く。ここ最近、ご主人が亡くなってから、荒川は元気がない。健一がトイレ誘導した時、オシッコを漏らしても、落胆したように沈みこむ。以前のように、健一に、八つ当たりして文句を言うこともない。どこか弱々しい老婆になっている。

「では、母をよろしく申し上げます」

息子は、健一と高倉に礼をして玄関の外に出た。

健一は、荒川の顔を見た。荒川は、無表情で健一の顔を見つめた。

大晦日の夜、ご主人のことを思って泣いていた荒川の姿が、健一に過った。その瞬間、健一は、思い立ったように外に出てゆく。

「あの・・・・・・・・」と、健一は、息子に声を掛けて引き止めた。

息子は振り返って、「何か？」と、尋ねた。

「もし、良かったら、荒川さんにも、お参りをさせていただきませんか？」

「えっ!？」

息子が、げんな顔をした。

「荒川さんは、亡くなられたご主人のことを、強く思われています」

健一は、自分の思ったままを言葉にした。

2月12日。

健一は、仕事を終えて『月光』で夕食をしていた。

「まったく、迷惑の話だよな」

健一は、グラスのビールをグツと飲んで笑いながら言った。

「それで、そのおばあちゃん、元気になったの？」

カウンターの中で、加奈子が尋ねた。

「ああ、息子さんが親族に頼んで、亡くなられた旦那さんの墓参りをさせてもらったら、元気を取り戻したよ。でも、また、自分の顔を見るなり、あれこれ、人を顎（あご）で使うようになったんだ。今日なんかも、入れ歯がないって、大騒ぎして大変だったよ。結局、自分のズボンのポケットにしまいこんでいたけど。まったく人騒がせな、ばあちゃんだよ」

健一は、愚痴のように荒川のことを言うも、加奈子には、楽しそうに話しているように見えた。

「あいつ、最近よく仕事のことを話すようになったな」

店の営業を終えた桜井が、皿を洗いながら気にかけるように、加奈子に言う。

「そうね……でも、健一さん、なんだが仕事が楽しそう」

加奈子が、思ったままを言う。

「仕事が楽しい……？ あれだけ、嫌がっていたのに！？」

桜井が手を止めて、加奈子の方を見た。

「だって、笑っているじゃない。施設のおじいちゃん、おばあちゃんの話をしている時」

「笑っている？」

一瞬、桜井は思い出すように考える。

「あなた、健一さんの親友でしょう。わからないの？」

加奈子が、念を押すように言う。

「そうだな……あいつ笑っていたな」

桜井は、思い出したように嬉しそうに言って、再び皿を洗い始めた。

2月14日。

健一は、昼食を終えた中島を、車イスで居室の洗面台に連れてゆく。

「中島さん、うがいをします。入れ歯を出して下さい」

健一は、洗面台の水道水をコップに注いで、中島に手渡す。

中島は、わかったように右手で上下の入れ歯を取出し、コップを受け取る。

中島はうがいをする。健一は、食べかすがついた入れ歯を水道水で洗い流す。

「洗い終わったので、どうぞ」

うがいを終えた中島に入れ歯を渡すと、口の中に入れ込んだ。大晦日の夜に指摘をうけて以来、うがいの時、声掛けをするように心がけるようにした。すると、スムーズに出来るようになった。

「こんにちは」

中島の孫娘が挨拶をして、居室に入ってきた。

「こんにちは」

健一は、親しそうに挨拶をする。

孫娘は、トレンチコートを脱ぐと、センタープレスパンツが、スラリと足を長く見せて強調的だった。

孫娘は、今年の春から、東京のテレビ局に就職することになっている。最近は、ちよくちよく会いに来ている。

「こちらで、中島さんと一緒に過ごされますか？」

健一は、わかりきったように尋ねた。

「はい、こちらで、おばちゃんといます」

「では、お帰りになる時、お声を掛けて下さい」

「あっ！ ちょっと待って下さい」

居室を出ようとする健一を、孫娘が引き止めた。

「良かったら、スタッフの皆さんで召し上がって下さい」

孫娘は、レジ袋から包装された箱を取り出した。

「チョコレートです」

今日は、バレンタインデーのため、娘が気を利かした。

「ありがとうございます」

健一が、リボンのついた箱入りチョコレートを受け取る。

「そうだ、中島さんが好きなチョコレートって、わかりませんか？」

健一が、チョコレートを見て思い出したように尋ねた。

「おばあちゃんが好きなチョコレート！？」

孫娘は、キョトンとして首を傾げた。

「ごめんなさい。私は、よくわかりませんが、父に聞いてみます。でも、どうして、おばあちゃんが、チョコレートを好きだとわかるんですか？」

孫娘は、中島がチョコレートを好きなことを意外そうに尋ねた。

「あ……それは、以前にチョコレートを欲しいって言っていました」

「えっ！？ おばちゃんが、そう言ったんですか？」

孫娘は、驚いたように言うのも無理がない。中島は、要介護5で言葉を発しても、何を言っているのかわからない。孫娘が話かけても返事がこない、つまり会話が成立しないのだ。会話ができないのに、チョコレートが欲しいと言ったことが不思議に思えた。

「あ、でも……ひよっとしたら、自分の聞き間違いかもしれませんから」

健一は、大晦日の夜のことを言おうとしたが、余計に複雑な説明になりそうだったので、はぐらかすような言い方をして居室を出た。

その後、健一は夜勤を担当することがあっても、大晦日に起こったことはなかった。だが、荒川、中島、織田が言っていたことは、夢ではないような気がした。どこか、本人自身の思いみたいなものを感じる。健一は、出来ることならば、その思いを叶えさせてあげたいという気持ちだった。何か人のために、役に立つことをしたい。そうすることが、健一自身も、何か変われることの、きっかけになる気がしたからだ。

3月21日。

加奈子は、銀座三越店の食品売り場にいた。母親が、千葉県の介護施設で生活をしている。月に一度会いにゆく。その途中、三越にある和菓子店に立ち寄り、饅頭を買ってゆく。それは母親の好物だった。

今日は、特別に全国の特産物イベントの日で、食品売り場に活気がある。ぶらりと、加奈子が特産物を見ていると、足がピタリと止まった。

長野県の特産売り場に、販売員で則子がいた。

則子は、加奈子と目が合った瞬間、ハッとした表情をしたが、すぐに軽く会釈をした。

「お久しぶりです」

加奈子は、親しそうに声を掛けた。

「いらっしゃいませ。お久しぶりです」

則子は、事務的な口調で言葉を返した。

「今、ここで働いているの？」

加奈子が興味深く尋ねた。

「ええ、今日から三日間だけ、ここの売り場で働いています」

則子は、漬物屋の販売店に勤めている。地元では有名な老舗で、全国にも店舗を出している名店だった。

「じゃ、わたしも何か買おうかな・・・何がおすすめですか？」

加奈子が陳列された漬物を見て、則子に尋ねた。

則子は、野沢漬けを勧めた。

加奈子は、則子の勧めるものを買う。

「では、550円です」

則子は、おつりの代金と、レシートに商品を入れた紙袋を加奈子に渡す。

「ありがとうございました」

則子が、加奈子に礼を言う。

「じゃね」

と言って、加奈子は、店を立ち去ろうとしたが、何か気にかかるようにして立ち止り、則子の元に近寄る。

「ねえ、もし良かったら、少し話さない？」

加奈子は、思い切ったように則子を誘った。

加奈子は、カフェで則子を待つことにした。

デパートの正面にあるカフェは、わかりやすく待ち合わせ場所には最適だった。

店に入ると、昼食の時間を終えた頃で、店のスタッフが慌ただしく、客が食べ終えたテーブルのかたづけをしていた。

加奈子は、店の奥のテーブルに座る。あらかじめ則子から、遅れてくることを聞かされていたので、先に食事をした。ちょうど食べ終えた頃、則子が店に現れた。

則子は、すぐに加奈子のいる席を見つけて急ぐように近寄る。

「待たせてしまって、ごめんなさい」

則子は、羽織ったコートを脱ぎながら、加奈子と差向えに座った。

「こちらこそ、お仕事中に無理じゃなかったの？」

加奈子が気遣うように言う。

「今、ちょうど昼休みの時間ですから大丈夫です」

則子は、加奈子を安心させるように優しく言う。

スタッフが注文を取りにきた。

「ホットコーヒーをお願いします」

則子は、メニュー表を見ることもなく、あっさりと注文した。

「こうやって会うのは、三年ぶりぐらいになるかしらん……確か、うちの店で食事に来た時以来だわね」

加奈子は、健一と則子が夫婦だった頃、真美を連れて来たことを懐かしそうに言う。

「ええ、真美が保育園児の頃ですから、かなり経ちますね」

則子は、ずいぶん時が経ったような言い方をした。

スタッフが、ホットコーヒーを則子の前に置く。

則子は、住んでいる場所のことや、勤め先のことを話題にして現状のことを話した。

突然、コートのポケットから携帯電話が鳴った。

「ごめんなさい」と、則子は言って、コートから携帯電話を取出し、相手を確認して電話に出た。

「はい、わかりました」

則子は、用件を聞いて電話を切る。

「ごめんなさい。すぐに仕事に戻らなきゃならなくなりました」

電話の相手は職場の人間だった。

則子はコートを着て、自分の前に置かれているレシートを手にした。

「いいわよ。私が誘ったから、ここは私が出すから」

加奈子は、則子の分の支払いをすることを告げる。

「いえ、そういうわけには・・・・・・・・」

則子は、レシートを手にして、加奈子の顔を見た。

そして、「あの人、元気にしています？」

則子は、さりげなく聞いた。

それは、加奈子にとっては、則子が自分に一番に聞きたいことだと思えた。

「健一さんのことね。元気にしているわよ」

加奈子は、則子の気持ちを察するように言う。

「そうですか・・・・・・・・では、よろしく伝えて下さい」

則子は、素っ気なく言って席を立とうとした。

「あ、でもね・・・・・・・・健一さん、何だか変わったみたい」

「変わった！？」

加奈子の言葉に反応するように、一瞬、則子が席を立つのを止める。

「これは私の感じたことだけど、以前の健一さんは、仕事人間で、どこかとげとげしいものがあった感じだったけど、今は、何だか人間的に優しくなったみたい。よく笑ったりもするし・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

則子は、健一の話に、一瞬目を伏せた。

「もし、良かったら、健一さんに会ってあげたら？」

則子の表情を見て、加奈子は余計なことだと思いつつも、心を決めて誘うように言う。

「えっ！」

思いもよらない言葉に、一瞬則子は、とまどう声を出した。

「・・・・・・・・ごめんなさい。そろそろ仕事に戻ります」

則子は、返事をはぐらかすように席を立ち、加奈子に礼をした。

「健一さん、きっと待っていると思う」

加奈子は、則子を呼び止めるように言った。

則子は、加奈子に背を向けたまま足を止めた。

「健一さん、もう一度、則子さんや、真美ちゃんと一緒に暮らしたいと思っているわよ」

加奈子は、健一の思いを、そのまま則子に伝えた。

則子は、加奈子の方を振り返ることなく、そのまま店を出て行った。

「則子さんに会った!？」

桜井が、皿洗いする手を止めて、加奈子を見た。

店の営業を終えた加奈子が、則子と会ったことを桜井に話した。

「それで、どうした？」

桜井は、興味深く尋ねた。

「思い切って、健一さんに会うことを勧めてみたわ」

加奈子が、カウンター席に座って、売り上げの計算を止めて言う。

「それで？」

桜井は、カウンターから身を乗り出すように尋ねた。

「でも、何も言わなかったわ……健一さんのこと、気にしているようにも思えたけど……」

加奈子が、がっかりしたように言う。

「そうか……」

桜井も、加奈子に同調するように言って、再び皿を洗い始めた。

「せめて、真美ちゃんだけでも、健一さんと会えるようになったら、いいんだけど……
・あっ! そうだね。ねえ、あなた、今則子さんが東京にいることを、健一さんに、教えて会いに行かせるのは、どうかしらん？」

加奈子は、思いついたように、桜井に相談した。

「やめとけよ」

桜井は、皿を洗いながら、あっさりと答えた。

「え、どうして？」

加奈子が、げげんな顔をした。

桜井は、皿を洗う手を止めた。

「俺たちが、あいつと則子さんの問題に立ち入ることじゃない。則子さん自身が、心から、健一に会いたいという気持ちがないかぎり、俺たちがどうやったって、うまくいかないさ。人の気持ちってというのは、そういうものだろう」

桜井は真顔で言う。

「そうよね……やっぱり無理か……」

加奈子は、納得しながらも残念そうにした。

再び、桜井は皿を洗い始めた。

則子は、東京での仕事を終えた日の夜に、長野に帰るはずだった。だが、手違いで残った商品を、会社に送り返す運搬車が、次の日の朝にしか来ないことになった。則子は、もう一日東京に居ることになった。

次の日、商品を運搬車に積み込んで、事務的な仕事を終えた時には、十二時近くになっていた。則子が、仕事を終えたことを会社に報告すると、今日は、会社に立ち寄らずに帰宅していいことを許された。午後から時間ができた。このまま長野に帰ってもいいが、せっかく東京まで出て来ているのだから、どこかに行ってみようと思った。だが、行きたいようなところが思いつかない。古い友人に連絡してみるも、急なことで会うことが出来なかった。結局、街をあてもなく歩くことしかなかった。

則子が歩く目の前を、三歳ぐらいの女の子を抱きかかえた若い父親と、その横に母親らしき女性が歩いている。父親も母親も笑顔で、子供は嬉しそうな顔をしていた。則子は、まるで昔の自分を見ているようだった。あの親子ずれのように、夫だった健一と、娘の真美と一緒に笑顔で歩いたことがあった。でも、それはもう昔のこと、戻ることのできない過去である。そう言い聞かせて、親子ずれとすれ違った時、ふと、加奈子が言っていたことを思い出す。『健一は変わった……』、どんなふうに変ったのだろうか？ 『変わった健一に会ってほしい』とも言った。

則子は、歩くのを止めて振り返り、通り過ぎた親子ずれの後ろ姿を見つめた。別れた夫が、その後、どんな人間になっているのか、妻だった則子には知る必要はなかった。だが、健一は真美の父親である。真美にとっては、父親が、どんな人間になっているのかを知る必要がある。そのことを伝えるのは、母親である自分でしかない。そう考えると、健一に会うのも必要だと思えてきた。則子は、スマートホーンを取出し歩き始めた。

小春日で、花の芽が出始めた桜並木の歩道がある。その横にバスが停まった。

則子がバスから降りてくる。バス停の目の前は小学校だった。鉄のフェンスの向こうで、子供達がグラウンドを走りまわっている。

則子は、スマートホンで写し出された地図を見て、桜並木が続く歩道を歩いた。

小学校を通りすぎると、田んぼや畑が拡がって、所々民家がある。

田んぼの真ん中に大きな看板が見えた。則子が、看板のある所まで歩いて足を止めた。看板には、『グループホーム南』と書いてあり、ここから200メートル先と真っ直ぐ矢印があった。

則子が矢印の方を向くと、周辺の民家よりは大きな建物が見えた。

則子は、その建物のある方へ歩き始めた。

則子が建物の門までやってきた。門の横には、『グループホーム南』と書いてある。門はレール式のスライドタイプだった。則子は、門を離れるようにして、建物を囲むブロックに沿って歩いて足を止めた。ブロックの奥は、小高木が並んでいる。則子は、木々の隙間から敷地内の庭を覗くように見た。

庭には、小さな花壇があって、その周辺にベンチが二つある。そのベンチに男女の老人と、若い女性スタッフが腰掛けていた。

建物は平屋で横長い造りだった。建物の中心にある玄関が開いた。中から健一が外に出て来た。一瞬、則子は、ハッとして身を隠すようにしゃがみ込んだ。そして、ゆっくりと立ち上がり、再び木々の隙間から覗きこむ。

健一が、数十メートル先にいる。でも心は、その距離より、もっと遠いものになってしまったことを、則子は自分の行動で認識した。

健一は、車イスをベンチに座った老人の前に移動させた。そして、しゃがみこんで老人に何か話かけている。その後、老人を車イスに乗せた。

再度しゃがみこんで、冗談でも言ったのか、ハハハと笑って見せた。その表情は、おだやかで満面の笑みだった。

健一が笑っている。則子には不思議な光景だった。健一の笑顔は、ここ何年も見ていなかった。

健一は、真美をよく保育園に連れて行く時笑っていた。自分自身も、健一のそばで笑っていた。いつしか、自分も健一も笑わなくなった。健一が、仕事の失敗で悩んでいた時、自分は、真美の小学校受験のことで必死だった。当時の健一は、仕事のことで精いっぱいだったのだろう。真美の受験にも、積極的に取り組むようなことは出来なかった。そんな夫に苛立ちを感じた自分は、健一と口論するようになった。その結果、健一は、妻である自分に、やすらぎを感じなくなって浮気をした。結局、それが離婚の原因だった。もしも、健一が仕事のことで悩んでいた時、優しく接していたら、今でも自分の前で、健一は笑っているだろうか？

「どうかされましたか？」

則子が、昔のことを考えていると、後ろから声がした。則子は、驚いたように振り返った。

「うちの施設に何か？」

尋ねたのは、施設長の高倉だった。

「いえ……………」

突然のことで、則子は返事に困った。

「こちらは、どんな方が生活されているんですか？」

則子は、健一にバレたら体裁が悪いと思いつつ、すぐに立ち去れない状況のため、つい話をしてしまった。

「ここは、グループホームです。認知症の方々が生活されていますが、入居のご相談でしょうか？」

「いえ……………」

「まあ、何かお困りのことがありましたら、こちらにでも、ご連絡いただけますか？」

高倉は、ジャンパーのポケットから、皮の名刺入れを取出し、則子に名刺を差し出した。

「あの……………ここで働いているスタッフの皆さんは、大変苦勞が多いんでしょうね？」
名刺を受け取って、則子は聞きたいことを尋ねた。

「確かに介護の仕事は大変です。スタッフは、ここで生活している方々のお世話をしていますが、認知症のお年寄りといっても人間です。時には、自分の意思とは違うことをされたと思えば、抵抗のため、暴言暴力なんかも受けることもあります。非常に苦勞が多い仕事です。それでも、スタッフの皆さんは、一生懸命やってくれています。なぜならば、ここにいるスタッフは、人間が好きなんです」

高倉は自信満々に笑顔で答えた。

「そうですか……………」

則子は、納得するように頷いて、庭にいる健一の方を無意識に見た。

「施設にお知り合いの方でも、いらっしゃるんでしょうか？」

則子の行動を見て、高倉は気に掛けるような聞き方した。

「いえ……………ありがとうございました」

高倉の問いかけに、則子は返事に困った。長くいると健一に気づかれてしまう。そう思った則子は、足早に高倉に礼をして立ち去った。

高倉は、則子が覗いていた庭の方を見る。車イスを押す健一の姿が見えた。高倉は、則子の後姿を見て首を傾げた。

「お～い！」

健一がホールに来ると、ソファに座った荒川が、大きな声を出していた。

「あっ！ 兄ちゃん。オシッコに連れていっておくれ！ 漏れそう！！」

荒川は、健一の姿を見るなり訴えるように言う。

健一は、荒川を手引き歩行でトイレに連れてゆく。

健一が、荒川のズボンと、紙パンツを下げて便座に座らせた瞬間、ジャーッと音が便座の中でした。

今日は何とか間に合った。

「良かった」と、荒川はホッと安心をする。

その後、荒川を手引き歩行して、ホールのソファに座らせた。

「兄ちゃん、ありがとうございました。おかげで助かりました」

荒川は、スッキリした様子だった。満面の笑みで礼を言った後、健一に手を合わせて感謝した。

「古田さん、荒川さんから拝まれましたね」

その姿を見た千春が、感心したように近づく。

「ついに古田さんも、仏になられましたね」

そう言って、千春が笑いながら去ってゆく。

千春は、茶化しているのか、誉めているのか、健一にはよくわからなかった。だが、正直なところ荒川とは、信頼関係みたいなものが出来ているような気がした。

今日の荒川は、機嫌が良く愛想よくしてくれる。だが、いつもは、ふてくされて、健一に当たるように文句を言うのが、ほとんどだ。健一は、素直にそれでいいと思った。口の悪いばあちゃんのほうが、荒川らしいと思えるようになったからだ。

荒川と目が合う。荒川は、健一に向かって手を合わせた。

健一は帰宅途中、夕食を買うために、自宅近くにあるコンビニに立ち寄った。店内に入って、弁当とウーロン茶に、ビールと酒の肴になるものをカゴに入れた。雑誌を置いてある場所を通った時、週刊誌の見出しが目に入った。

『エロい、檀蜜』という文字があった。そのフレーズに反応するように健一は、雑誌を手にした。すると、袋とじになって、なまめかし表情で、白い下着姿の檀蜜の写真があった。彼女は長い黒髪だった。それを見た瞬間、織田が言っていた女性は、彼女のことじゃないかと直感した。以前、織田は消灯時間になっても、ホールでテレビに熱中していたことがあった。健一が、寝る時間だと告げても、テレビを見たいことを強く言って拒んだことがあった。その時、テレビに出演していたのが、檀蜜だったことを思い出した。健一は手に取った雑誌を買った。

3月24日。

出勤時、健一がアパートから出ると、則子から携帯に電話があった。思いもよらない相手のため、一瞬、驚きながらも電話に出た。

「あ、久しぶり……………」

健一は、歩きながら則子の話を聞いた。

「うん……………4月2日か……………えっ！」

ピタリ、健一が足を止めた。

「いいのか!？」

健一は、念を押すように聞き返した。

「わかった。かならず、その日は時間を作るよ……………あっ、則子」

健一は、声ははずませなら、則子を引き止める言い方をした。

「ありがとう」

健一は、心から感謝したように言う。電話を終えた健一は、うかれた様子でバス停に向かった。

4月1日。

施設の庭には、桜の花が咲いている。

「すまないが、昼寝をしたいので、部屋まで連れて行ってくれないか？」

ホールのソファで織田が咳をして、健一に言う。

健一は、織田を車イスに乗せて居室に連れてゆく。

「妙に何か浮かれているようだが、何かいいことがあったのか？」

織田は、ベッドに体を寄せて尋ねた。

健一は、織田の前で嬉しさを顔に出していた。

「実は・・・・・・・・明日、娘と会うんだ」

健一は、笑顔で答えた。

「それも泊りで二日もだよ。ディズニーランドに行くんだ。でも、どうして急に則子は、娘を会わせてもいいと思ったんだろう・・・・・・・・？ でも、会えるから、いいか」

「良かったな・・・・・・・・」

興奮したように話す健一を見て、織田は、にっこりと笑う。

「織田さんの言ったとおりだよ。自分の変わったところを、則子や娘に見せようと思って、頑張ってみるものだね・・・・・・・・あつ！ そうだ、ちょっと待っていてくれないか」

健一は、思いついたように居室を出て、事務室にある自分のロッカーから、雑誌を手にして、織田の元に戻ってきた。

「織田さん」

健一の声掛けに、眠りかけていた織田がパチリと目を開けた。

「織田さん、覚えているかな、以前に自分に頼んでいた女性の写真って、彼女のことかい？」

健一は、大晦日の出来事を、織田は忘れていいのかもしいないと思いつつも、半信半疑で、両手で雑誌を広げて、檀蜜の写真を見せた。

織田が雑誌を手にした。

「欲しかったのは、彼女のことかい？」

健一が確かめるように尋ねた。

「うん」

織田が頷く。

「そうか、じゃ、これプレゼントするよ。袋とじになっているから、後で切っておくからね」

「すまなかったな・・・・・・・・」

織田は、檀蜜の写真を見ながら、ボソリと言った。

「いいよ。別に・・・・・・・・これはアドバイスしてくれたお礼だよ・・・・・・・・やっぱり年の甲だよ。これからも、いろいろ相談にのってくれないかな？ 出来ることなら、則子とも、よりを戻したいと思っているし、真美と三人で暮らしたいと思っているんだ」

健一は照れもあり、織田に背中を向けて一方的に話していると、いびきが聞こえた。振り返ると、織田は、雑誌を自分の胸に置いて心地よく眠っていた。

健一は、織田に近寄り、毛布をかけて居室を出た。

4月4日。

朝、健一は、ディズニーランドのおみやげ袋を手にして出勤する。

「おはようございます」

健一は、娘に会えた嬉しさを表すように、機嫌良くスタッフに挨拶する。

「これ、皆さんで食べて下さい」

健一は、おみやげ袋からチョコレートを取り出し、皆に見せて、席を外している施設長の机の上に置く。

「それから、これ織田さんに買って来たけど、ほら、ヨレヨレのハット帽しか持ってなかったから」

健一は、織田のために、ミッキーのメッシュキャップを買った。

「でも、これ九十の老人にはあわないか……どうしても、娘が買えって言ったけど」

健一は、嬉しそうに娘のことを話すも、どこか浮いている様子だった。いつもなら、笑いが起きる雰囲気なのに、今日は何か違う。シーンとしたものがあった。

「その織田さんのことですけど……」

千春は複雑な表情で言う。

「千春ちゃん、どうしたの？」

健一が、いつもと様子が違うことを感じて尋ねた。

「今朝、織田さんがお亡くなりになりました」

「えっ!？」

思いも寄らぬことで、健一は目を丸くした。

昨日、織田は肺炎をおこして病院に搬送され、今朝亡くなったことを知らされた。

4月10日。

健一が出勤すると、織田の娘が、居室でかたづけをしていた。

健一は、娘に挨拶をするため居室へ出向く。

「いろいろ父がお世話になりました」

娘は、織田の衣類を、ダンボールにつめている手をとめて、健一に礼を言う。

「いえ……」

織田の死は突然のことで、健一は、娘に何と声を掛けていいのか、わからなかった。

「父は、とても穏やかな表情で亡くなりました」

娘は、笑みを浮かべて言う。

それは、父親の死を悲しくすることより、優しく送りだしたことを意味していた。

「父がわがまま言って、ずいぶん困らせたそうですね……ご迷惑かけて、ごめんなさい……ありがとう」

娘は感謝するように、健一に深く礼をする。

「いえ、こちらこそ、未熟な介護でしか、お世話できなくて……」

礼を言いたいのは、健一の方だった。織田のアドバイスで、娘とも会うことができた。そう思っていた健一には、織田自身に礼を言えなかったことが、今となっては心残りだった。

「先ほど、他のスタッフの方に聞きましたら、古田さんが父に渡されたと？」

娘は、ベッド上に置いてある雑誌を手にして尋ねた。

「その雑誌には、織田さんが気に入っている女性が載ってまして……どうしても、彼女の写真が欲しいというものですから、僕からプレゼントさせていただきました」

「どの人ですか？」

娘は、雑誌をパラパラめくり始めた。

「どうやら、檀蜜のことみたいですけど」

健一の言葉に、娘の手がピタリ止まる。

娘は、檀蜜のグラビアを目にして、

「父から、黒髪の長い女性の写真が欲しいって、言われたんですね？」

娘は、わかりきったような尋ね方をした。

「えっ！？ どうして、そのことを？」

娘が、檀蜜のことを知っているのが意外だった。

「以前、私も、父から頼まれたことがあります。黒髪の長い女性の写真のことを言われました……でも、この女性ではありません。確か、檀ふみさんでした」

「檀ふみ……!？」

健一は、その女優のことは知っていた。70年代に、テレビの青春ドラマに出演していた清純派女優で、長い黒髪が印象的だった。

「織田さん、ずっと奥さんのことを思っていたようですね」

健一の言葉に反応するように、娘は雑誌を閉じた。

「奥さんの、面影に似た女性の写真を欲しいぐらいですから・・・・・・・・」

健一が、織田のことを褒めたたえるように言う。

「いえ、それは違います。その女性は、母ではありません。母以外に父が、愛した女性です」
娘は、あっさり否定するように言う。

「・・・・・・・・」

健一は、娘の言葉に啞然とした。

「父は母と結婚して、まもなく戦争に出兵しました。戦後、戦地から横浜に帰還した時、負傷した足が痛み出して、その時に助けてもらった若い女性と、恋仲になったそうです」

「その女性が、長い黒髪の女性なわけですか？」

健一が納得したような尋ね方をする。

「そうです・・・・・・・・やがて、傷も治り、父は女性と別れ、母のいる九州に帰ってきました。その後、父は商社で働き始めて、私たち子供も授かりました。単身赴任で東京勤務になった時、偶然、その女性と再会したそうです。その時、その女性は、重い病にかかっていたそうです」

「・・・・・・・・」

「父は、その女性と一緒に暮らし始めて、献身的な看病をしたそうです。でも、そのことは、すぐに母にわかってしまいました。母は、父にその女性と、別れることを告げました。でも、父は、彼女は、自分にとっては、命の恩人と言って、離れることはなかったそうです。やがて、その女性も亡くなり、父は母に謝って、私たち家族の元に戻ってきました」

「奥さんは、織田さんのことを許したんですか？」

健一は、興味深く、気になることを尋ねた。

「許すしかなかったようです。母も、父と別れて生きてゆくほど、経済的な余裕もなかったようです。でも・・・・・・・・」

娘は言葉を切って、

「同じ女性として、母のことを思うと、私は、父のことを許せません」

娘は、心の内を強調するように言った。

「いくら認知症でも、亡くなる間際まで、母のことよりも、その女性のことを思っているなんて、父って、勝手すぎますよね」

娘は、呆れた顔で笑みを浮かべた。その表情は、織田への憎しみの裏返しのように見えた。

その日の夕方。

健一が、織田の居室にやってきた。かたづけられた居室は、布団のないベッドが、ひとつだけあるだけだった。ガランとした居室の空間は、空しいものを感じる。

窓には、夕日が差し込んでいた。

ベッドの上に、檀蜜が載った雑誌が置いてあった。娘が置いていった。

健一が、雑誌を手にして窓を開けた。肌寒い風が吹き込んでくる。

健一が、ベッドに腰かけて雑誌をめくると、檀蜜のグラビアが目に入る。

織田は、自分に対して嘘をついたのか。

織田が、大晦日の夜に言っていたことと、今日娘が、話したことにはズレがある。

織田の話では、長い黒髪の女性と暮らした後、妻のところに戻るまで苦労したような話をしてきた。だが、娘の話では、経済的な理由で妻は、仕方なく許したように言っていた。

どちらが、本当のことなのか。やはり認知症だから、思い込みのようなもので言ったか。だが、大晦日の夜の織田は、普段とは違っていた。ひょっとして、自分を勇気づけるため、そう言ったのだろうか。

今となっては、そのことを確かめることはできない。グラビアの檀蜜が、笑を浮かべて、健一を見つめている。

4月15日。

健一は、仕事帰りに『月光』に立ち寄る。

カウンター席に座り、焼き鳥とビンビールを頼んだ。

「はい、お待たせ」

桜井が、焼き立ての手羽先を皿にのせて、健一の前に置いた。

健一は、手羽先をパクリとかぶりつく。

「それで、今度は、いつ会えるんだ？」

桜井が、気になるように尋ねた。

「うん・・・・・・・・今度のゴールデンウィークに、松本へ行こうと思っているんだけど・・・・・・・・まだ、則子から返事かこないんだ」

健一が不安そうに言う。

すると、健一の携帯電話が鳴った。着信音はメールだった。その音に反応するように、健一は、すぐに携帯電話を手にする。その行動は、待ちこがれていたことを表していた。

加奈子は、テーブルのかたづけをしている手を止めて、気になる様子で、健一の方を見た。

健一は、携帯メールを見た後、にんまりとする。そして、すぐに返信メールをした。

「その顔だと、真美ちゃんと会えるようだな」

桜井が、健一の表情を見るなり、わかりきったように言う。

「来月はじめに松本に行って、真美と会えることになったよ」

健一は、嬉しそうに答えた。

「良かったわね。健一さん、また真美ちゃんと会えるようになって」

加奈子も、嬉しそうに健一に近寄る。

「うん、本当に良かったよ・・・・・・・・これからは、いい父親として、真美に接していかなきゃなあ」

健一は、宣言するような言い方をした。

「でも、どうして、則子は、急に、真美と会わせることを許してくれたんだろうか!？」

健一は、不思議そうに首を傾げた。

「それわね・・・・・・・・」

加奈子が、東京で、則子に会ったことを話そうとした。すると、

「そんなこと考えるより、楽しんでこいよ」と、

桜井は、加奈子が、余計なことを言いそうになったので口をはさんだ。

それに気づくように、加奈子も口をつぐむ。

「そうだな。楽しんでくるよ」

健一も、桜井の言葉に納得するように頷いた後、グラスのビールをグッと飲み干した。

4月25日。

春の陽射しは、そう強くもなく心地よい暖かさだった。

健一は、施設の庭で、背もたれのあるベンチに腰かけていた。そのそばには、荒川が座っている。健一の正面には、車イスに乗った中島がいた。

健一は、箱入りのチョコレートを中島に見せた。それは、孫娘が気にかけて用意したものだった。

「中島さん、チョコレート食べられますか？」

健一が尋ねると、中島は右手を差し出す動きをした。

「わかったよ」

健一は、銀の紙で包まれた、薄型四角形のチョコレートをひとつ取り出す。紙を開いて、中島の右手の上に置いた。

中島は、健一の顔を見た後、チョコレートをゆっくりと口の中に入れた。

「中島さん、ずっと食べたかったチョコレートって、これじゃないの？」

健一は、中島の耳元で大きな声で尋ねた。

中島は無表情のまま、モゴモゴとチョコレートを食べていた。

「やはり、違うか……」

健一は、中島の姿を見て、がっかりしたように言う。

健一は、大晦日の夜に、中島が食べたいと言っていたチョコレートを探している。だが、なかなか見つからない。昔からあるものなのか、それとも最近のものなのか、手当たり次第買ってきても、中島に食べてもらうも反応がない。孫娘が、用意したものに期待があったが、やはり違っていた。

「一体、どんなチョコレートなんだ？」

健一が尋ねてみても、中島は無言のままだった。

「古田さん」

高倉が言い寄ってきた。

「お疲れさまです」

高倉は、労うように言って、給料明細の入った茶封筒を差し出した。

「ありがとうございます」

健一は、立ち上がり両手で茶封筒を受け取った。

「その後、新しい仕事のほうは見つかりましたか？」

高倉は、ずっと気になっていたことを尋ねた。

「実は・・・・・・・・この仕事を続けていこうと思っています」

健一は言いにくそうにするも、すぐに、きっぱりと言った。

「そうですか！ 古田さんが、ここで働いていただけることは、私としては嬉しく思います」

高倉は、感激したように嬉しい表情をする。

「しかし、また、どうして、介護の仕事をやろうと思ったんですか？」

高倉は、気になったことを尋ねた。

「人と接する仕事も、そんなに悪くないって、思えたものですから・・・・・・・・」

健一は照れながら、自分が、そんなことが言えたのが不思議だった。

「そうは言っても・・・・・・・・実際のところ、これから、どうやって認知症の人と接していけばいいか、まだ、わかりませんが・・・・・・・・」

健一は、付け加えるような言い方をした。それは本音だった。

「何も難しいことを、考えることはないと思います。私は、ここに、いらっしゃる皆さんに、介護のお世話をしながら、素敵な思い出作りをしてあげたいと思っています」

「素敵な思い出・・・・・・・・！？」

健一は、高倉の意味ありげな言葉に反応した。

高倉は、にこりと笑い、自分の思いを話始めた。

「ここで生活している皆さんは、やがて、人生の終末を迎えている人ばかりです。本当は、家族と一緒に過ごしたいはずですが、しかし、やもえない理由があって、家族と離れて暮らしています。私は、ここで生活している皆さんには、その人らしい生活をしてもらいたと思います」

「・・・・・・・・」

「認知症とはいえ、皆さんにも感情があります。泣いたり、笑ったり、怒ったり、その時々で、私たち介護者は、苦勞したりもします。でも、それは、人間的なことだと思います」

「・・・・・・・・」

「私たちは、何も特別なことをするわけじゃありません。利用者さんの、ありのままを受け止めてあげたらいいんです。きっと、その人らしいものがあるはずです」

高倉は、強い意思みたいなものを感じさせる。

「そうですよね」

健一は、高倉の思いに共感した。年老いて認知症になっても、すべてを忘れていないわけではない。どこか、自分らしいものはある。

「頑張って下さい」

高倉は激励するように言う。

「はい」

健一は、素直に頷いて返事をした。

「ところで、施設長・・・・・・・・以前に言われたことですが・・・・・・・・実は、僕も大晦日に」

「もしもし、兄ちゃん！」

健一が、高倉同様に施設の利用者から、アドバイスを受けたことを話そうとすると、急に思い立ったように荒川が、健一を呼ぶ。

「どうした？」

健一が、ベンチに座っている荒川に近寄る。

「兄ちゃん、オシッコ・・・・・・・・オシッコ行きたい！ もう、漏れそう！！」

荒川は、切羽詰まったように言う。

「わかった」

健一は、荒川の両手を持ってベンチから立たせた。

「早く便所に連れて行きなさい！！」

荒川は漏れそうなのか、健一に命令口調になる。

「我慢だよ。漏らしちゃいけないよ！」

健一は、大きな声で荒川の耳元に告げて、手引き歩行で施設の中に入ってゆく。

完